

# ヴォルテールの『オイディプス』における ライオス殺害者の追跡

渋谷 直 樹

## I. はじめに

1718年11月18日、ヴォルテールは悲劇作家としてデビューした。それは彼が24歳になる3日前のことである。その後60年にわたり30作品以上もの悲劇を書くこととなるヴォルテールが最初に選んだ戯曲は『オイディプス』であった。当時劇は大成功を収め、45回上演されたが、A・J・エイヤーによればこれは異例の回数であったという<sup>1)</sup>。一方でジャン・ゴールドジンは、1718年から1720年の2年間の上演回数を42回としているものの、その後の公演は20年を一単位として、1721年から1740年には42回、1741年から1760年にかけては51回、1761年から1780年では39回上演されたと報告している<sup>2)</sup>。またヴォルテールの個々の悲劇の総回数で見ても、『ザイール』の480回、『タンクレード』の384回に次いで、『オイディプス』は『メロープ』と共に第3位の340回である<sup>3)</sup>。さらにこの処女作

---

1) A. J. Ayer, *Voltaire*, Londres, Weidenfeld and Nicolson, 1986, pp.6-7.

2) Jean Goldzink, « Introduction », dans Voltaire, *Le Fanatisme ou Mahomet le prophète ; Nanine ou l'Homme sans préjugé ; Le Café, ou L'Écossaise*, éd. Jean Goldzink, Flammarion, coll. « GF », 2004, p.17. さらに1801年から1820年には71回というヴォルテールの生前でも見られなかった多くの回数が20年間で行われ、1821年から1840年では減少したとはいえ56回の公演が見られる。

3) *Ibid.*, pp.17-19. ただ『オイディプス』の上演も、1841年からは1860年の20年の間に20回行われたのみで、その後は長い間舞台に上がることはなかった。*Ibid.*, p.17. そして次にヴォルテールの『オイディプス』が見られるのは、150年経った2011年のパリ・リュセルネール劇場公演においてである。

が人気を博したことについては、アンリ・リヨンやダニエル・モルネ、アンドレ・モロワにJ・H・ブラムフィットらもすでに認めていた<sup>4)</sup>。

さてヴォルテールが最初の悲劇として『オイディプス』を選んだのは、彼以前にソポクレス、セネカ、コルネイユがすでに創作していたことを考えれば、もちろんそれは先代の作品に対する挑戦である<sup>5)</sup>。したがってこの戯曲が成功を取めた理由について、今まで研究者たちによって述べられてきた見解は、結局それはヴォルテールの『オイディプス』に導入された彼独自の思想や演出に結びつけられることとなる。そこでこの悲劇において最も注目され、のちの彼の作品全般の基盤ともなるべきものとして対象となっているのが、宗教に対するヴォルテールの見解である。アンドレ・モロワは『オイディプス』に見られる聖職者と宗教批判について言及し、彼の作品を反抗時代における反抗の戯曲と呼んでいる<sup>6)</sup>。同じようにクリスチャン・ビエもヴォルテールの創作意図を腐敗していた

4) ただモルネにおいては上演年が1719年となっているが明らかに1718年の間違いである。Henri Lion, *Les Tragédies et les théories dramatiques de Voltaire*, Hachette, 1895 ; Genève, Slatkine Reprints, 1970, p.1 ; Daniel Mornet, *La Pensée française au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Armand Colin, 1969 [1926], p.9 ; André Maurois, *Voltaire*, Bernard Grasset, 2005 [1935], p.27 ; J. H. Brumfitt, *The French Enlightenment*, coll. « Philosophers in Perspective », éd. A. D. Woozley, Londres et Basingstoke, Macmillan, 1972, p.68.

5) 本論ではヴォルテールの引用に関しては、以下の略号を用いる。Voltaire (François Marie Arouet, dit), *Œuvres complètes de Voltaire / Complete Works of Voltaire*, Oxford, Voltaire Foundation, 1968- (OC) ; *Œuvres complètes de Voltaire*, éd. Louis Moland, Garnier-Frères, 1877-1885, 50+2 vol. (M) ; *Correspondance*, éd. Theodore Besterman, Gallimard, coll. « Bibliothèque de La Pléiade », 1977-1993, 13 vol. (GC). なお個々の作品に編者がいる場合は、初出のみ校訂者を記し、演劇の引用では幕（ローマ数字）、場（算用数字）、行数と共に話者も示す。また作品のタイトルの後の年数は、作品自体の初演、執筆もしくは出版の年を表すものであり、引用の下線はすべて筆者による。

6) André Maurois, *op. cit.*, pp.26-27.

宗教と迷信への攻撃としている<sup>7)</sup>。さらにルネ・ポモーは2人の批評家よりも詳しく考察している。彼によれば、エピグラムだけでは物足りず悲劇というジャンルを用いることで、自分の意図を果たそうとしたヴォルテールは、1713年から『オイディプス』を書き始め、当時親密だったドスヴィーユ夫人に劇中の詩を披露したところ、その内容が原因で敬虔な彼女とは縁が切れてしまったという。そしてその詩の対象となっていたものというのが、聖職者に対する批判だったのである<sup>8)</sup>。だが同じ批評家は、ヴォルテールが『オイディプス』を書いた最大の理由を、聖職者を攻撃することだけではなく、目に見えない主人公として点在する残酷で独裁的な神を描くことによって、罪に結びつけられたジャンセニストの救霊予定説を批判することであったと考えている。同様にこの戯曲の創作目的に関連して、コルネイユの『オイディプス』においては自由意志が、ラ・モットの同作品においては恩寵と自由意志との調和を目指すモリナ説がテーマになっている、とヴォルテールとの相違を示す意見がルネ・ポモーには見られる<sup>9)</sup>。

宗教問題についての研究以外では、ノルベール・スクリッパがこの悲劇の真の主人公はオイディプスではなくイオカステだと主張させている。ヴォルテールは女優たちの強要で恋愛話を導入するために、イオカステの元恋人としてピロクテテスを登場させた。彼女は最終的にはライオスと結婚することになるが、ピロクテテスを愛していたという行為はたとえそれがいつきのことであったとしても、ライオスとの結婚に対し異を唱えることと同じことである。その時点で当時の家父長制の絶対的な法に背いた彼女は罪びととなり、そしてライオスとの結婚を通して罰せられたのである。ここでは当時の社会の伝統に対するヴォルテール

---

7) Christian Biet, *Œdipe en monarchie : tragédie et théorie juridique à l'âge classique*, Klincksieck, 1994, p.263.

8) René Pomeau, *La Religion de Voltaire*, Nizet, 1956, p.76 et 82.

9) *Ibid.*, pp.85-89.

の考えがイオカステのジレンマを通して見られる、とノルベール・スクリッパは指摘している<sup>10)</sup>。一方、舞台演出の視点からヴォルテールがギリシア悲劇に倣って導入したコロスに着眼する批評家たちもいる。もともとコロスを取り入れるよう促したのはアンドレ・ダシエであったが、ヴォルテール自身もソポクレスやコルネイユ、ラシーヌと競いたいという野心と共に、いかにしてギリシア悲劇をフランス古典劇に適用すべきかという手本を示すためにコロスを導入した、とダビッド・ジョリーは述べている<sup>11)</sup>。同時にこの批評家においては、コロスに対する当時の俳優らの反応や、ヴォルテールがコロス役としてテーバイの市民を選んだ背景についての言及も見出される<sup>12)</sup>。その他の批評家の意見にも目を向けると、クリスチャン・ビエは新しいジャンルであるオペラの発展に沿って悲劇を作るというのがヴォルテールの意図だったと論じており、ミシェール・マツ＝アスカンもヴォルテールにとってコロスの導入は、舞台を彩るための装飾の役割以外の何物でもないと言い切っている<sup>13)</sup>。さらにヴォルテールがこのソポクレスの悲劇を選び大人気を博した理由を、アンドレ・モロワとルネ・ポモーは、当時摂政であったオルレアン公フィリップと娘のベリー侯爵夫人との近親相姦に対する揶揄と見ている<sup>14)</sup>。

以上のような研究テーマがヴォルテールの『オイディプス』における議論の中心となっている<sup>15)</sup>。反対に個々の問題ではなく、この悲劇の全体

---

10) Norbert Sclippa, *La Loi du père et les droits du cœur : Essai sur les tragédies de Voltaire*, Genève, Droz, 1993, pp.74-75.

11) David Jory, « Introduction » des *Lettres sur Œdipe* [1719], éd. David Jory, *OC*, t.1A [2001], p.316.

12) *Ibid.*, pp.316-319.

13) Christian Biet, *op. cit.*, p.263 ; Michèle Mat-Hasquin, *Voltaire et l'Antiquité grecque*, Oxford, Voltaire Foundation, 1981, p.157.

14) André Maurois, *op. cit.*, p.26 ; René Pomeau, *op. cit.*, p.83.

15) ルイ・モランは当時でも大いに議論の対象となったことを示すために、ヴォルテールの『オイディプス』について1719年に書かれた14の評論と、1720年と年代不

を通しての主題そのものの流れに沿った研究は少ないと考えられる。つまり彼の悲劇の主題を大きく2つに分け、オイディプスがライオスの殺害者であると発覚してから親子関係を認知するまでの過程を1つの主題とするならば、ライオスの殺害者が発覚するまでの展開をもう1つの主題として考察することも重要であると思われる。というのも、ヴォルテールは犯人の発覚と出生の認知を、戯曲の前半と後半というように別々に扱っているからである。さらにライオスの殺害者が見つかるまでの展開に関して言えば、彼は上演の翌1719年に『オイディプスについての書簡』という小論文を書き、ソポクレスにおけるライオス殺害者の追跡の不自然さを批判している。そこではどうしてオイディプスは殺害について何も知らないのか、なぜ王殺しの目撃者が生きているのにすぐ呼ばないのか、というアリストテレスの推奨する「本当らしさ」が問題として取り上げられている。したがって、このギリシアの哲学者の意に沿ってソポクレスの『オイディプス』に見られる不合理を克服しようという挑戦の気持ちも、ヴォルテールにこの悲劇を書かせることとなった大きな要因の1つとして考えられる。とはいえ結論から言ってしまうと、彼自身もソポクレスに見られる展開の不自然さを克服できなかった。第1幕でポリュクスについて言及されるものの、彼がオイディプスの前に現れるのは結局第4幕である。しかしながら、ポリュクスが登場するまでの間ヴォルテールは、ピロクテテスを登場させる。確かに彼は最初の3幕にしか舞台には現れず、突然退場し結末には何ら関与しないこともあり、ヴォルテール自身も反省しているように非難的となっているが、それでもライオスの殺害者を追跡して行く展開にちょうど並行して、この英雄も不名誉な役柄であるとはいえ一役買っていると思われる。この人物についてはダビッド・ジョリーが、ライオス殺しの手人であるという容疑がかけられた際、今までヘラクレスと共に世界を駆け巡り積み上げて

---

詳の評論のタイトルをそれぞれ1つずつ列挙している。Louis Moland, « Avertissement sur *Œdipe* », *M*, t.2 [1877], pp.9-10 (n.2).

きた栄光や名誉だけを頼りに、自分は無罪であると頑なに言い張るピロクテテスのその態度に、法治に対する反感と理性・知性への軽蔑を見出している<sup>16)</sup>。ただこの批評家はピロクテテスの態度だけに焦点を当てているが、この英雄とオイディプスに加え、彼の腹心イダスブとの間で繰り上げられるライオス殺害者についての議論を詳しく見てみると、ヴォルテールの司法に関する思想を知る上でも、犯人捜しという1つの主題を構成する大事な場面と見なすことができる。またピロクテテスが登場しない他の場面においても、王殺害の捜査の過程を追っていくことで、今後のヴォルテールの演劇理論も垣間見られるのである。

そこで本論では、オイディプスがライオスの殺害者であると判明するまでの過程に目を向けたい。ただヴォルテールにおいては、オイディプスの親子関係の認知は、すでに述べたように王殺しの発覚後にもう1つの山場として行われるので、これについては最後に簡単に触れることにする。そしてライオス殺害の犯人が発覚するまでの場面は、今まで創作された『オイディプス』全てに共通して見られるものなので、ヴォルテールの独自性を理解するためにも、ソポクレス（前430年頃）、セネカ（後50年頃）、コルネイユ（1659年）の同一作品はもちろんのこと、ヴォルテールの影響を受けたイエズス会修道士で修辞学の教師メルシオール・ド・フォラル（1720年）と、さらには当時アカデミー会員であったアントワヌ・ウダール・ド・ラ・モット（1726年）の悲劇も一緒に比較したい<sup>17)</sup>。それでは先ずソポクレスに対する批判から「本当らしさ」を重要視

16) David Jory, « Introduction » d'*Œdipe* [1718], éd. David Jory, OC, t.1A, pp.85-86.

17) ヴォルテール以外の作家については以下の版を用いる。Sophocle, *Œdipe roi* [vers 430 av. J.-C.], dans *Tragédies*, t. II, 11<sup>e</sup> tirage rev. et corr. par Jean Irigoin, éd. Alphonse Dain et trad. Paul Mazon, Les Belles Lettres, coll. « Collection des Universités de France », 2002 [1958]; Sénèque, *Œdipe* [vers 50 après J.-C.], dans *Tragédies*, t. II, 3<sup>e</sup> tirage, éd. et trad. François-Régis Chaumartin, Les Belles Lettres, coll. « Collection des Universités de France », 2011 [1999]; Pierre Corneille, *Œdipe* [1659], dans *Œuvres complètes*, t. III, éd. George Couton, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade »,

していたヴォルテールの姿勢を眺め、次に彼の悲劇におけるその対処を考察する。その後で王殺害の容疑者についての議論に目を向け、最後にオイディプスがライオスの殺害者であったと判明する場面を調べよう。これらの考察を通して、先代の『オイディプス』の展開上の欠点を少しでも改善しようしながらも、自分の思想を取り入れるだけでなく、今後の演劇理論の基礎を作り上げようと試みた、若きヴォルテールの詩人像が浮き彫りにされると思われる。

## Ⅱ. 『オイディプス』における「本当らしさ」

### 1. ソボクレス批判

ヴォルテールが自分の『オイディプス』において、どのような点に注意してライオス殺害の犯人発覚までの展開を組み立てたのかを把握するために、先ずソボクレスに対する彼の批判を見たい。ヴォルテールは初演の翌1719年に『オイディプスについての書簡』という小論文を書き上げ、その中でソボクレスの次のような場面に言及している。それは、疫病が蔓延したテーバイを救うためにアポロンの神託を伺いに行き、デルポイから戻って来たイオカステの兄クレオンが、「あの方 [= ライオス] は亡くなれました。そして今や神はあの方の復讐をし、下手人を打ち倒すようはっきりと私たちに厳命されました」(Sophocle, v.106-107 [Créon]) とオイディプスに報告すると、それに対し「ライオスが殺されたのは、彼の館なのか、それとも野原なのか、または国外なのか？」(Ibid., v.112-113 [Ædipe]) とオイディプスが尋ねる場面である。彼のこの質問を採り挙げてヴォルテールはこうに言っている。

---

1987 ; Melchior de Folard, *Œdipe, tragédie. Par Le Père Folard Jésuite* [1720], chez Jossé le fils, 1722 ; Antoine Houdar de La Motte, *Œdipe* [1726], dans *Les Œuvres de théâtre de M. de La Motte*, t.II, chez Grégoire Dupuis, 1730. そしてこれらの作家の悲劇作品では作家名のみを示し、幕・場・行数、下線についてはヴォルテールの引用の仕方に準じる。

だいぶ以前から統治しているオイディプスが、どのようにして彼の前任者が死んだのか、またその殺人がなされたところが野原なのか町なのかさえも知らないこと、そして自分の無知に対し少しの理由も言い訳も彼が述べないことは、本当らしさにすでに反している。このような不合理を説明するには、どのような言葉を用いたらよいのか正直私には分からない<sup>18)</sup>。

ここでヴォルテールが問題にしているのは、悲劇作品においてアリストテレスが重要視していた「本当らしさ」のことである。ギリシアの哲学者はこの「本当らしさ」こそが、劇作術における作家の使命と見なしこう定義している。「詩人の任務は実際に起こったことを述べるのではなく、起こり得るであろうことを、ありそうな仕方で、あるいは必然的な仕方で語ることである<sup>19)</sup>。」ここで先ほどのヴォルテールの引用と照らし合わせてみるならば、今後筋を進めていくにあたり、その時点では当然あり得るであろうこと、あるいは、あってしかるべきことが、ソポクレスの『オイディプス』には組み込まれていない、ということになる。つまり、ライオスがどのように亡くなったのかを、たとえオイディプスが

18) *Lettres sur Œdipe*, OC, t.1A, pp.336-337.

19) Aristote, *La Poétique*, éd. et trad. Roselyne Dupont-Roc et Jean Lallot, Seuil, 1980, chap.9, v.1451a36-1451b1. アリストテレスは適切な筋の長さについて述べる際にも同じ表現を用いている。「ありそうな仕方で、あるいは必然的な仕方で、数珠つなぎに起こる出来事によって、不幸から幸福へ、あるいは幸福から不幸へと逆転させるまでの広がり、長さとしての適切な範囲である。」*Ibid.*, chap.7, v.1451a12-1451a15. また登場人物の描写方法では何度も言い回しを変えながら繰り返されている。「性格においても、出来事の体系的な組み立ての場合と同じように、必然的なこと、あるいはありそうなことが常に求められなければならない。こういう人物ならこのように言ったり行ったりすることが、必然的なことで、あるいはありそうなことであり、またこのような出来事があのような出来事の後に起こるのも、必然的、あるいはありそうでなければならない。」*Ibid.*, chap.15, v.1454a33-1454a36.



詳しくは知らないとしても、彼がその事件について全く知らないということ自体があり得ないことであり、その上その理由も述べられてさえいないことがヴォルテールにはどうしても納得がいかないのである<sup>20)</sup>。なおこの矛盾についてアリストテレスは「本筋の外」という語を用いてその対処法をすでに指摘していた。

不合理な部分はできる限り含むべきではないが、もし避けられない場合は、本筋 (l'histoire racontée) の外に置かなければならない。例えばライオスがどのようにして亡くなったのかを、オイディプスが知らなかったということが、そのようになされていたように<sup>21)</sup>。

« l'histoire racontée » を直訳すれば「物語化される筋」となり、作品においての現時点のこととして同時に進行されていく筋、すなわち「本筋」のことをいい、それに対して「本筋の外」は本筋の始まる前に起こったこと、あるいは本筋の後に起こることを意味する。そしてアリストテレスにおいては、できることならライオスの死因に関して、オイディプスが知らないという不合理は避けるべきなのだが、ただそれは彼が王になる前に起こった出来事なのでやむえないこととし、そのような場合は「本筋の外」に置くことで何とか許されている。そう考えれば、ヴォルテールの方がこのギリシアの哲学者よりもソポクレスに対して厳格であると言える。

次にソポクレスの中で述べられているライオスの殺害者の人数に関する矛盾が指摘される。ヴォルテールはクレオンの「ライオスは盗賊たちに出会い、彼は1人の男の腕ではなく、大人数の襲撃のもとに倒れたと、

20) ラ・モットでは、オイディプスは王妃からライオスは偶然亡くなったと聞かされていたので、先王が殺されたこと自体知らなかった。La Motte, II, 4, v.410-411 [Edipe]: II, 5, v.426-427 [Edipe] et v.430 [Jocaste].

21) Aristote, *op. cit.*, chap.24, v.1460a28-1460a31.

彼 [= 殺害から逃れた者] は主張しておりました」(Sophocle, v.122-123 [Créon]) という報告を採り挙げて、次のような疑問を投げかけている。「ライオスと彼の供の者を殺害したのはたった1人の男であった、というのが事実であるのに、彼の主人は多数の手にかかって打ち倒されたと、どのようにしたらライオスの死の証言者はそのようなことを言うことができるのであろうか<sup>22)</sup>？」王の殺害を目の当たりにした者がいくら動揺していたとはいえ、1人の襲撃者を複数の者と見間違えるようなことは、ヴォルテールには考えられことなのであった。しかしながら、コルネイユの『オイディプス』にも殺害者の人数に関する報告のずれが見られる。ただし17世紀の劇作家の作品の場合にはその理由が述べられている。殺害現場から何とか逃れたポルバスは、最初の報告では3人にやられたと伝えていたのだが、実際はたった1人の者にやられたとは、恥ずかしさと不名誉からとても正直に本当のことを言う勇気がなかった、とイオカステに白状している (Corneille, IV, 2, v.1339-1342 [Jocaste])。したがって、ソポクレスの羊飼ひ [ヴォルテールは「ポルバス」と呼んでいる] にも同じような心理が働いていたということも考えられるが、18世紀の詩人にはそこまで考える余裕がなかったと言える。さて話を戻して、今度もオイディプスとイオカステの目撃者に関する報告に目が向けられている。ヴォルテールは先ず「矛盾の極みとして、第2幕でライオスは旅行者によって殺害されたという噂だが、それを見たという者は誰もいない、とオイディプスは言っている<sup>23)</sup>」と話を切り出す。その次にライオス

22) *Lettres sur Œdipe*, OC, t.1A, p.337.

23) *Lettres sur Œdipe*, OC, t.1A, p.338. 実際ここでのヴォルテールによるソポクレスの引用は、コロスとオイディプスによるやり取りである。「彼 [= ライオス] は外国の旅行者によって殺害されたという噂です。——私もそう聞いた。だがその事実を目撃した者を、ここでは誰も会っていないのだ。」Sophocle, v.292 [Le Chœur] et v.293 [Œdipe]. そしてギリシア悲劇は「プロロゴス」、「パドロス」、交互に行われる「第1-4エペイソディオン」と「第1-4スタシモン」、「エクソドス」と分けられているが、ヴォルテールはソポクレスの『オイディプス』を引用する際

の殺害者の人数について、改めてオイディプスに確認を求められた王妃の返答が引用されている<sup>24)</sup>。

イオカステは第3幕でこの王の死について話しながら、オイディプスに次のように説明している。

ライオスに供をした者が、彼の主人は盗賊たちによって殺されました、と報告しましたことについては、疑う余地はございません。彼は今となっては意見を変えることも、別のことを言うこともできないでしょう。町全体の人々も私と同じように聞いたのですから<sup>25)</sup>。

先ほどのオイディプスの発言では目撃者はいないと言っていたのにもかかわらず、イオカステのこの発言においては、町全体が目撃者の証人であるという。したがってヴォルテールはこの意見の食い違いをこう評している。「もしもスフィンクスの謎が、この訳の分からぬ話よりも解くのが簡単でなかったならば、テーバイ人たちは憐れむべき者らであったであろう<sup>26)</sup>。」いかにもヴォルテールらしい皮肉である。

最後にもう1つだけソポクレスの中で、ヴォルテールの目には「本当らしさ」に反していると思われるものを採り挙げたい。そこではライオスに付き添い王殺害の目撃者となった召使 [= ボルバス] の召喚を巡っ

---

「幕 (acte)」を用いているので、彼に言い方に即して訳す。

24) オイディプスは殺人者の人数に関する証言にこだわり、次のようにイオカステに述べていた。「羊飼いによれば、ライオスを殺害したのは盗賊たちであると、あなたは申しておったな。したがってもし彼が大勢であったと繰り返したならば、もはや殺害者は私ではない。1人の男では大勢になることはできぬからな。反対に、もし彼が1人の男で単独の旅人であったと言った時には、それこそその罪の責任は私にあるとはっきりと言えるであろう。」Sophocle, v.842-847 [Œdipe].

25) *Lettres sur Œdipe*, OC, t.1A, p.338. 斜字はヴォルテール自身によるものである。

26) *Ibid.*, p.338.

てのオイディプスの対応が、組上に載せられている。

ポルバスがまだ生きていることをオイディプスが知った時、彼は召使を呼びに遣ることさえ考えていない。この王は自分に光を与えることができる唯一の男を彼の前に連れて来ることを命じることもなく、(下手人に対して)呪いをかけたり、神託に尋ねたりして無駄に時間を潰しているのである<sup>27)</sup>。

神託にあくまでも頼ろうとする王の態度について述べながら、反対にその信憑性を信じていないヴォルテールの考えも垣間見えるのであるが、それよりも目撃者が生きているという事実が判明したのにもかかわらず、どうしてオイディプスは現状の切迫した問題をすぐに解決してくれるはずであろうこの生き証人を自分の前に真っ先に呼ぼうとしないのか、それが18世紀の詩人には理解できないのであった<sup>28)</sup>。次にヴォルテールはコロスの対応にも批判を投げかけている。

テーバイの不幸が終焉するのを見届けることにもっぱら心を砕き、オイディプスにいつも助言を与えているコロスは、亡き王のこの証人 [=ポルバス] に尋問するようオイディプスに勧めてはいない。コロスはただテイレシアスを呼びに遣ることだけをオイディプスに懇請しているだけである<sup>29)</sup>。

27) *Ibid.*, p.338. cf. Sophocle, v.244-251 [Œdipe].

28) 実際ソポクレスにおいては、「(ライオスと共に殺害されるという)恐怖から逃れた1人の者を除いては全て殺されました」とだけ報告されていたのであって、現時点ではその者が逃れはしたものの、まだ生きているかどうかは言及されていない。Sophocle, v.118-119 [Créon].

29) *Lettres sur Œdipe*, OC, t.1A, p.338. cf. Sophocle, v.284-286 [Le Coryphée].

普段であれば王に適切なアドバイスをするコロスが、今回に限ってはライオスの殺害を目撃した召使ではなく、盲目の預言者であるテイレシアスと呼び寄せて、事件の真相を解明するようオイディプスに勧めるという失態を演じている、としかヴォルテールには思われないのである。またコロスと同じ態度をとった王に対しても、「オイディプスは第2幕の初めに、ポルバスと呼び寄せる代わりにテイレシアスを彼の前に来させている<sup>30)</sup>」と、ヴォルテールは指摘することを忘れてはいない。そしてようやくポルバスが登場したことについて彼は述べている。

ポルバスは第4幕においてついに到着する。ソポクレスを知らない人は恐らく、ライオスの殺害者を知ってテーバイ人たちに息を吹き返したくて堪らないオイディプスは、急いで亡き王の死について彼に尋問すると想像するだろう。だがそうしたことは何も見られないのである<sup>31)</sup>。

確かにここのやり取りを見てみると、議論の対象がオイディプスの出生の問題へと変わっているのが確認できる。したがってヴォルテールは「ソポクレスはライオスの死のための復讐が彼の戯曲の主題であるということをおぼれている<sup>32)</sup>」と皮肉った後、次のように結論づけている。「この（ライオス殺害の）出来事について誰もポルバスに一言も話さない。そしてポルバスも自分の主人である王の死について口を開くことさえなく、悲劇は終わってしまうのである<sup>33)</sup>。」オイディプスにはテーバイを救うことはもはや念頭になく、ただただ自分の出生にだけ心を奪われているので

30) *Lettres sur Œdipe, OC, t.1A, p.339. cf. Sophocle, v.300-315 [Œdipe].*

31) *Lettres sur Œdipe, OC, t.1A, pp.338-339. cf. Sophocle, v.1119-1185 [Œdipe, le Serviteur (Phorbas) et le Corinthien].*

32) *Lettres sur Œdipe, OC, t.1A, p.339.*

33) *Ibid., p.339.*

ある。さて以上見たように、ヴォルテールにとってソポクレスの悲劇の中で不合理と思われるものは、大きく分けて3つ見られた。1つ目はオイディプスがライオスの死因を知らないということ、2つ目は王殺害者の人数に関する不明瞭な報告、最後の3つ目は殺害の目撃者をすぐに尋問しないということである。そしてこれらの3つは全て王殺害の犯人探しに関することが分かる。したがってヴォルテールがこれほどまでにソポクレスにおける王殺しの追跡の流れを批判している以上、彼もそこに十分に気を遣って自分の作品を書いたはずである。それでは次に彼がこの点に関しどのように対処したのかを調べるために、上記の非難を念頭に置きながら彼の『オイディプス』でのライオス殺害者の犯人発覚までの過程を考察しよう。

## 2. ヴォルテールの苦心

ヴォルテールの作品ではライオスが亡くなったという事実だけはすぐに言及されている。かつてのイオカステの恋人ピロクテテスは、彼女のことが忘れられず10年ぶりにテーバイに戻って来る (*Edipe, OC, t.1A, I, 1, v.121-130 [Philoctète]*)。彼が久しぶりに再会した友人のディマスに、疫病に感染しているテーバイの現状について尋ねると (*Ibid., I, 1, v.20 [Philoctète]*)、友人は「王 [=ライオス] の死以来… […]/ 4年前からもはやこの王は生きておりません」 (*Ibid., I, 1, v.21-22 [Dymas]*) と答える。それを知ったピロクテテスには、未亡人となったイオカステと再び昔の関係に戻ることができるかも知れない、という希望が生まれるのであるが (*Ibid., I, 1, v.24 [Philoctète]*)、すぐさま彼女にはすでに新しい夫がいると旧友に教えられ、そこでこの英雄はオイディプスの存在を知ると同時に (*Ibid., I, 1, v.133 et 136-137 [Dymas]*)、当時彼女がライオスと結婚すると聞いた時に感じたのと同じ絶望へと陥るのである (*Ibid., I, 1, v.138-139 [Philoctète]*)。そういう訳で、ライオスが4年前に亡くなったということ自体は言及されているものの、それはイオカステと結婚できるかできないかという色恋が当面の問題となっているだけであって、

王の死の原因はピロクテスにとっては何ら興味の湧かない話なのである<sup>34)</sup>。

そこで実際にライオスが殺害されたことが話題の中心となるのは第1幕第3場となる。テーバイの悲惨な状況を目の当たりにして、「人間の主人である神々は何も語らず耳が聞こえないのであろうか?」(*Edipe*, OC, t.1A, I, 3, v.170 [*Edipe*]) と嘆くオイディプスに対し、大祭司はライオスの亡霊が現れ自分に語ったことを現在の王に教える。

テーバイ人たちはライオスの遺灰のために復讐をしなかった。

王の殺害者はこの国で生きており、

お前たちの国を彼の不純な息で汚染しているのだ。

---

34) ヴォルテールはソポクレスに従って自作の『オイディプス』に、ギャラントリーをもともと挿入するつもりはなかったのだが、最終的にこの挿話を取り入れることになった。彼は1731年のルイ・ル・グラン学院の恩師であったシャルル・ボレの書簡の中で、その経緯に触れながら恨み言を並べている。「女優たちは恋をする女性 [ヴォルテールによる強調] の役がないのを見て私を軽蔑しました。[...] 当時私はあまりにも若く、彼女らが正しいと思っていました。彼女らを喜ばすために、少しも愛の感情など入る余地もない主題を、この恋心によって無味乾燥にしながら駄目にしてしまったのです。彼女らは色恋話が少しでも導入されたのを見て、私への不満を和らげたのです。」10年後の書簡にも、「私は19歳 [1713年] の時に、ソポクレスに倣って1つの悲劇作品を創作しました。そのギリシアの悲劇には恋愛話は入ってさえません」という『オイディプス』におけるギャラントリーの不必要性が強調されている。ところがヴォルテールは自分のことは棚に上げて、彼と同じように自分の作品に色恋話を挿入していたコルネイユの悲劇に対して、厳しい評価を出版者のクラメールに伝えている。「(ソポクレスの『オイディプス』の) 主題は最も恐ろしいものとはいえ、それ [=コルネイユの『オイディプス』] は、我々が持つフランス史上最もひどく、最も滑稽でさえある作品の1つなのです。」Lettre à Charles Porée, 7 janvier 1731, GC, t.I [1977], pp.257-258 ; Lettre à Odet-Joseph de Vaux de Giry, février 1743, GC, t.II [1977], p.707 ; Lettre à Gabriel Cramer, vers le 10 février 1763, GC, t.VII [1981], p.97.

この怪物を見つけ出すがいい。そしてライオスの受けた不当な仕打ちを償うがよい。

民衆よ、お前たちの救済は彼の処罰にかかっているのだ。

(*Ibid.*, I, 3, v.176-180 [le Grand-Prêtre])<sup>35)</sup>。

この大祭司の話を聞いてオイディプスは自分に課されたものが、ライオスの殺害者を見つけることであると分かる。そこですぐさま彼は次のように述べる。

何ということか、王の死の証言者はいなかったのか？

この罰せられないでいる罪の痕跡を、

これほどの不思議な出来事の中で、今まで見出すことはできなかったというのか？

この罪深い手を王に振り上げた者は

1 人のテーバイ人であったと人はいつも私に言っていた。

(*Ibid.*, I, 3, v.198-202 [Edipe])。

すでに上述したように、ヴォルテールはソポクレスでのライオス殺害者の人数について批判していた。そこで彼の悲劇では、王に剣を振りかざした者は1人であると「いつも」(toujours) 聞いていた、とオイディプ

---

35) ライオスの亡霊はイオカステの前にも現れている。彼女は腹心のエジーンにその様子を語っている。「蒼白で血を滴らせた私の最初の夫の亡霊が、/ この恐ろしい深淵の中で脅迫をするかのように現れた。/ 彼は私に私の息子を見せていた。私の腹の中で / 彼の不幸な血によって作られ、/ 私の敬虔で残酷な不正が / 我々の神々に対し内密に犠牲にした息子を。」(*Edipe*, OC, t.1A, II, 2, v.109-114 [Jocaste]). このライオスの亡霊に関してセネカにおいては、神託を聞きに行ったクレオンが130行にもわたって先王の言葉を伝える場面が見られる。Sénèque, v.530-658 [Créon].



スに言わせることで、証言は変わらないということが強調されている<sup>36)</sup>。確かにこの発言からソポクレスと同じように18世紀のオイディプスも、先王の事件の真相については知らないことになるのであるが、しかしヴォルテールでは今までライオスが殺されたことについて追及しなかった理由が述べられている。

彼 [=ライオス] の死から2年後に、あなた [=イオカステ] の手から

彼の王冠を受け取り、王位に就いた私はといえば、

今まであなたの苦しみをいたわり、

あなたの目から涙を流させるような話を思い出させないようにして参りました。

そしてあなたへの危険だけを日々心配していた

私の魂は、他の配慮には閉ざされているようでした。

(*Ibid.*, I, 3, v.203-208 [Edipe]).

ライオスが亡くなって2年ののち、イオカステと結婚したオイディプスは、先王の出来事を思い出させることで彼女を悲しませないように努めながら、同時にテーバイを襲っている伝染病に王妃が感染しないよう、それだけに心を砕いていたのである。またここでは言及されていないが、テーバイに疫病が蔓延し、ライオスの殺害者が分かるのは、ライオスの死から4年後のことなので (*Ibid.*, I, 1, v.22 [Dymas] et IV, 3, v.215-216 [Edipe])、ヴォルテールの『オイディプス』は、2人が結婚してから2年

36) コルネイユについては先ほど確認したが、他の作家を見ると、セネカでは「盗賊の団」(Sénèque, v.285-286 [Créon])とあり、フォラルでは「2人の盗賊」(Folard, III, 4, v.778 [Créon])とされているが、ラ・モットではヴォルテールと同じく「1人の若い戦士」(La Motte, III, 6, v.619 [Jocaste])と報告されている。

後の物語ということになる<sup>37)</sup>。そして彼はこのようにライオスの事件を知らない理由をオイディプスに語らせたものの、この言い訳についてヴォルテールは自ら批評していた。

こうした付度はオイディプスの無知の有効な口実になるとは私には思われない。彼女の最初の夫の死について話しながら、自分の妻に不快感を与えるかも知れないという恐れは、彼の前任者の死の状況について調査することを妨げる理由には全くなならない。それはあまりにも控え目なことであり、あまりにも関心を持っていないことになってしまふのである<sup>38)</sup>。

オイディプスがライオスの殺害について知らないというソポクレスで見られる矛盾を批判しておきながら、ヴォルテール自身も満足のできる言い訳を王に与えることができなかったのである。言うは易く行うは難し、とさぞかし実感したことであろう。

さて夫の気遣いを知ったイオカステは、「ポルバスだけがこの旅では彼と一緒にいました」(*Edipe, OC, t.1A, I, 3, v.213 [Jocaste]*) と、ライオスには供の者がいたことをオイディプスに教えた後、彼女は当時の状況について詳しく述べている。

彼 [=ポルバス] の目の前で、痛めつけられた王の  
見るも無残なご遺体を、我々の国に持ち帰って来たのは彼でした。  
彼自身も剣で刺され、辛うじて身を引きずってやって来た  
血だらけの彼は、王妃の膝元に倒れたのです。  
「見知らぬ者たちが、と彼は言いました、このようなひどい攻撃をした

37) フォラルールでは、ライオスが亡くなった後の3年間はイオカステの兄クレオンが統治していた、という設定になっている。Folard, II, 2, v.407-408 [Jocaste].

38) *Lettres sur Edipe, OC, t.1A, pp.364-365.*

のです。

彼らは私の目の前で、あなたの夫を虐殺したのです」。

(*Ibid.*, I, 3, v.217-222 [Jocaste])。

イオカステは何とか生き延びて戻って来た供の者によって、夫王であるライオスの死を知るのだが、ポルバスは「それ以上は私には何も言わなかった」(*Ibid.*, I, 3, v.225 [Jocaste]) ので、彼女自身も詳しいことは分らなかったのである。ただヴォルテールにおいては、事件以来どうして今まで夫である王の殺害者を追跡しなかったのか、という理由がイオカステによって述べられている。

ライオスの死から間もなくして、スフィンクスがこの国を荒廃させました。

テーバイはその猛威だけに気を配って参りました。

スフィンクスに対し震撼している時に、このような恐怖にあっては、人は他の者の死のために復讐などほとんどできるような状態ではなかったのです。

(*Ibid.*, I, 3, v.231-234 [Jocaste])。

ライオスが殺された直後は王殺しの犯人を突き止めようという気持ちはあったものの、やがてスフィンクスに国が襲われることとなり、自分たちのことで精一杯で人のことに構っている余裕などはなかった、と王妃は不追跡の理由を述べている。だがそれよりもライオスには生き残った供の者がいたという重大な事実を知ったオイディプスに、「そこでその忠実な臣下に対しどのように人々は処したのか？」(*Ibid.*, I, 3, v.235 [Ædipe]) と尋ねられたイオカステは、当時のことを思い出しながらこう答えている。

人々は彼本人 [=ポルバス] を告発しました。共通の激情でもって、

テーバイ全体が大きな叫び声をあげ、彼の死刑を私に要求しました。  
 そしてあらゆる方向からの彼に対する不当をひどく恐れた私は、  
 彼を許すことにも、あるいは彼に死刑を命じることにも戦慄を覚えました。  
隣の城に密かに彼を連れて行って、  
彼らの憤激から彼の首を守りました。

(*Ibid.*, I, 3, v.241-246 [Jocaste]).

テーバイの民衆によってライオス殺害犯の容疑がかけられたボルバスに  
 対し、判決を下すことを恐れたイオカステは、人目を忍んで先王の臣下  
 を匿ったのであった。だがここでもヴォルテールはテーバイ王の立場か  
 らこのイオカステの返答を批判している。「ボルバスの話について知らない  
 というのも、彼 [= オイディプス] には許されないことである。国家  
 の要人 [= ボルバス] が、彼について何も知られることもなく、何年も  
 牢獄にいるほど、人目につかない人物には決してなり得ないであろう<sup>39)</sup>」  
 そこでヴォルテールは上記に引用した台詞の最後の2行の詩を指しながら、  
 「この2行の韻文詞は批判をあらかじめ防ぐために置かれたとしか人  
 は思わないであろう<sup>40)</sup>」と、フォルバスに対するオイディプスの無知を取  
 り繕うためにイオカステに言わせたこの詩も、無理があったことを素直  
 に認めているのである<sup>41)</sup>。そしてボルバスの言及について話を戻すと、「そ  
 れ以来そこで4年の冬を過ごしているこの尊敬すべき老人は / [...] / 私

39) *Lettres sur Œdipe*, OC, t.1A, p.365.

40) *Ibid.*, p.365.

41) ヴォルテールの4年後の1722年に書かれたメルシオール・ドゥ・フォラルの  
 『オイディプス』では、イオカステの兄クレオンが野望のためにボルバスを幽閉  
 する。先王に付き添い辛うじて殺害を逃れた彼は、ライオスの息子が生きている  
 ということを知っている。したがってもしこの事実が露見したなら、クレオンは  
 息子のメノイケウスを王位に就かせることができなくなってしまう。そこでボル  
 バスが真実を漏らさないように、クレオンは彼を牢に閉じ込めるのである。Folard,  
 IV, 3, v.1045-1048 [Créon].

に対しても殺気立った民衆に対しても不平を言うこともなく、/ 自分の無罪が証明されて自由の身となることだけを待っております」(*Edipe, OC, t.1A, I, 3, v.247-250* [Jocaste]) とイオカステは、ポルバスの現在の状況について王に付け加えている。したがってポルバスがまだ生きていることを知ったオイディプスは従者に申し付ける。

走って行きなさい。急ぐように。

彼の牢の門を開けるように。彼を来させなさい。彼が姿を現すように。私自身があなた [=イオカステ] の前でポルバスに尋問することを望みます。

私は私の民衆と一緒にライオスのために復讐をしなければなりません。洗いざらい聞いて、厳格な目で

この悲しき謎の深淵の深さを測らねばなりません。

(*Ibid.*, I, 3, v.251-256 [Edipe])。

オイディプスはライオスの殺害者の犯人を特定するために、直ちにポルバスを彼の前に呼ぶよう命じたのである。

### Ⅲ. ピロクテテスへの嫌疑

#### 1. 英雄の無可謬性

ポルバスの召喚をオイディプスは望んだものの、結局ヴォルテールにおいても彼は第4幕まで登場しない。その代わりにその間は、誰がライオスを殺害したのかという議論が展開される。そこで真っ先にオイディプスの腹心イダスプは容疑者として「この瀕死の状態にある民衆は / 声を揃えてピロクテテスを告発しております。」(*Edipe, OC, t.1A, II, 1, v.1-2* [Hidaspe]) と、ヘラクレスの友人の名を挙げる。この発言によってイオカステはかつての恋人であるピロクテテスがテーバイに戻って来たことを初めて知るのであるが (*Ibid.*, II, 1, v.5-6 [Jocaste])、イダスプは先王に対して今までとってきたこの英雄の態度について述べる。

皆が知るように、ピロクテテスはライオスを憎んでいました。そして彼の憎しみは、  
 あなた様の夫の目にはほとんど隠し切れておりませんでした。  
 若気の至りはいとも容易く露呈するものです。  
 上手く取り繕うことのできなかった彼の表情は恨みを露わに見せておりました。  
 いかなる事情が彼の怒りを掻き立てたかは私には分かりません。  
 しかし王の名を聞いただけで、あまりにも血気に逸り、あまりにも素直な  
 ピロクテテスは抑えきれない激昂の奴隷となり、  
 王を威嚇するほどにまで逆上し、  
 出発したのでした。

(*Ibid.*, II, 1, v.9-17 [Hidaspe])。

イオカステを奪われたピロクテテスは明らかにライオスに対し、嫉妬と敵意を感じていたのである。そして彼はヘラクレスの供をするということをお口に、10年前にテーバイを後にしたのだった。だがピロクテテスが旅立ってから6年後にライオスが殺害され、実は彼が殺害に関与していたという可能性を、イダスプはイオカステに示す。

天が恐ろしい王殺害で刻んだ  
 この不幸な時期に、彼はちょうどテーバイにいたのでした。  
 その痕跡をもとにその重大な日以来、  
 我々の民衆の不信感は彼の上に落ちたのです。  
 というよりもかなり長い間テーバイ人たちの疑いは、  
 ポルバスと彼との間で定まらず漂っておりました。  
 しかしながら、ピロクテテスが戦で得たその偉大な名、  
地上の復讐者であるという名高いその肩書、  
洪々ながら我々が英雄らに示すその尊敬が、

我々の疑いを黙らせ、我々の行動をとどまらせていたのです。  
ですが、時は変わりました。テーバイはこの不吉な日に、  
危険な尊敬の残りを捨てたのでした。

(*Ibid.*, II, 1, v.19-30 [Hidaspe])。

ポルバスにも容疑がかけられたのだが、恋人であったイオカステがライオスと結婚することを知って、恨みを抱えたままこの国を去ったはずのピロクテテスも、実は王が殺害されたまさにその時にテーバイにいたのだ。当然その事実から彼に対し民衆は心の底では大逆罪の疑いを持ったのだが、この英雄の輝かしい功績と名前から生じる畏れから、彼が犯人であると誰も思い切って口にするのができなかったのである。実際の悲劇ではピロクテテスは犯人ではないので彼にとっては冤罪ということになる訳だが、このイダスプの発言には、たとえある人物が罪を犯したとしても、その者の持つ権力によって彼の犯罪には目をつむらざるを得ない、という周りを取り囲む弱き立場にある者らの心理が描かれている。だがそれではいけないと悟った民衆は目を開き、英雄の肩書に惑わされることなく、真実を突き止めようと立ち上がったのである。

ところがこのイダスプとの対話の後に、イオカステとピロクテテスとの再会の場面が展開される。10年ぶりに元恋人にあった王妃は、「私たちは殺人者を祭壇で犠牲にしなければなりません。／人々はその者を探し、あなたの名を挙げ、ついにはあなたを告発しています」(*Edipe*, OC, t.1A, II, 3, v.167-168 [Jocaste])と現在の状況を告げ、「もしかして私があなただの目に愛おしく、／まだ私を愛して下さるのですでしたならこの国から立ち去って下さい」(*Ibid.*, II, 3, v.179-180 [Jocaste])とテーバイを出発することを彼に促す。それに対しピロクテテスはイオカステを永遠に失うということを嘆くが(*Ibid.*, II, 3, v.182 [Philoctète])、それでも彼女は自分への思いは断ち切って彼が旅立つようもう一度説得するのである(*Ibid.*, II, 3, v.195-196 [Jocaste])。そんな元恋人同士のやり取りの時にオイディプスがやって来て、ライオス殺害者に関する議論が彼とピロクテ

テスとの間で始められる。先ずこの英雄はこのように切り出す。

人々がどんな大罪で私の人生を汚そうとしているのか私は知っております。

ですが私が自分を正当化するなどとは思わないで下さい。

私はあなたを大いに尊敬しております。ですから身を卑しめてまで  
こうした低俗な嫌疑を、あなたが私にかけることができようとは思っ  
ておりません。

(*Ibid.*, II, 4, v.205-208 [Philoctète])。

自分のような英雄を疑うようなこと自体、卑俗な人間のやることであると、オイディプスに釘を刺して、ピロクテテスは自分の無可謬性が認められていることを当然のことと考えている<sup>42)</sup>。ピロクテテスはなおもオイディプスを見下してこう述べている。「あなたの名も一緒に連ねられるこれらの名前 [= テセウス、ヘラクレス、ピロクテテス] の名誉を、/ 中傷によって汚さないで下さい。」(*Ibid.*, II, 4, v.213-214 [Philoctète])。自分を自ら殿堂入りさせ、英雄は嫌疑とは無縁な存在であることを彼は強調しているのである。このようなピロクテテスの態度にオイディプスは王の立場として次のように答える。

人間たちに役立つこと、この国を救うこと、  
それこそが私が憧れる名誉です。  
[...]

42) イオカステも同じ観点でピロクテテスを疑う民衆を見ていた。「あなた [= ピロクテテス] の心は私には知られております。あなたは私の信頼を得ています。/ あなたは私に相応しくないようなことはできません。/ 神々が見捨てたテーバイ人たちのことは忘れて下さい。/ あなたを疑うということからして、彼らは死に値するのです。」(*Edipe*, OC, t.1A, II, 3, v.175-178 [Jocaste]).



確かに私はあなたに罪を負わせたくはありません。  
 もし天が犠牲者の選択を任せて下さるのでしたら、  
 私は自分自身しか犠牲にしないことでしょう。  
 国のために命を落とすこと、それこそが王の義務です。  
 この名誉はあまりにも偉大ですので、他の人に譲ることはできません。  
 自分の命を断ち切り、あなたの命を守ることでしょう。  
 2度私は我が人民を救うこととなるでしょう。

(*Ibid.*, II, 4, v.217-227 [Edipe])<sup>43)</sup>。

本当であればスフィンクスの禍からテーバイの人々を救ったように、今回も王として自分の命を投げ打ってでも、疫病を収束させたいとオイディプスは心から願っている<sup>44)</sup>。だが彼には王としてもう1つ大事なことがあった。それは、事件を解明し真実に則った公正な立場でライオスの殺害者を罰することも、正義を守る上で王に課せられた義務の1つなのである。したがってオイディプスは自分が犠牲になることを望みながらも、ピロクテテスに冷静に述べている。

しかし私には選択の自由は与えられていません。

---

43) この王の自己犠牲の精神はフォラルに受け継がれている。彼のオイディプスは言っている。「君主以上に父親である王は / 自分の臣民をパルカ [生死を司る3女神] に引き渡すどころではなく、彼女らから引き離すのです。 / 血の一滴でさえ王にとっては大きな代償に思われるのです。 / 全ての者の父親であり、全ての臣下は彼の息子なのです。」Folard, III, 6, v.897-900 [Edipe].

44) 王以外で救済のために自分の命を犠牲にすることを望む登場人物は他の作家に見られる。フォラルでは、クレオンの息子メノイケウスが、テーバイと共にライオス殺害の罪を着せられた父親を救おうと命を捧げようとする場面がある (Folard, III, 6 et IV, 1-3)。またラ・モットにおいては、国を救い栄誉を勝ち取るために、オイディプスの息子であり兄弟であるポリュネイクスとエテオクレスが、すでに争う場面が展開されている (La Motte, II, 3-4)。

私たちが流さなければならないのは犯罪者の血なのです。  
 あなたは告発されています。あなたを守ることを考えて下さい。  
罪がないということを見せて下さい。私の宮廷であなたのような1人  
 の英雄の  
 名誉を讃えることができることは、私には大変甘美なことでしょう。  
 そして被告人としてではなくピロクテテスとして、  
 あなたに接しなければならないのでしたら、私は幸せでいられること  
 でしょう。

(*Ibid.*, II, 4, v.228-234 [Œdipe])。

いくら英雄であろうとその肩書だけで無罪であると決することはできな  
 い。どんな者であれ公平な立場で判断されなければならない、とオイデ  
 イプスは主張しているのである。だがピロクテテスは自分の無罪を主張  
 する。

私の名に懸けて私は告白したい。  
私は自分が疑いを超えた存在だとさえ思っていました。  
 告発されているこの腕は嵐を引き起こす代わりに、  
 おぞましい殺人者たちから国を救ったのです。  
 ヘラクレスは彼らを制することを教えてくれました。  
彼らを罰した者は彼らの真似などはしないもののです。

(*Ibid.*, II, 4, v.235-240 [Philoctète])。

ここでもピロクテテスは、自分のような特別な者は、罪を犯したという  
 容疑からはかけ離れた存在である、ということを力説している。その上  
 自分の功績から考えてみても、ライオスを殺害するなどという不名誉な  
 ことはしないのである<sup>45)</sup>。とはいえ、ピロクテテスが何と言おうとも、や

---

45) セネカには、オイディプスから王位篡奪の疑いをかけられたクレオンの次のよう

はりオイディプスにとっては、英雄だからといって罪を犯していないという保証はどこにもない。彼は続ける。

武勲に捧げたあなたの手が大罪で  
 名誉が汚されようとは私も思っておりません。  
 そしてもしライオスがあなたの攻撃に倒れたとしても、  
 恐らく名誉に包まれあなたの足元で息を引き取ったことでしょう。  
 あなたは高潔な戦士としてしか彼を打ち破らなかったのです。  
 私はあなたの正しさを大いに認めます。

(*Ibid.*, II, 4, v.241-246 [Edipe]).

もしピロクテテスがライオスを殺害したとしても、それは不当な理由からではなくそれ相応の訳があつてのことだろう、とオイディプスはその正当性を認める。したがってその場合はライオスに非があつたのであり、ピロクテテスの今までの功績に傷がつくということにはならないのである。しかしながら、罪を犯したと思われること自体許すことのできないピロクテテスは、ついには人間を見下したように反論している。

#### 私の罪とは何なのでしょうか？

もしこの剣がライオスを死者の国に落させたとしても、  
 それは私にとって勝利が一つ増えただけのことでしょう。  
 臣下にとって王は人々が尊敬する神です。ですがヘラクレスと私にと  
 って、

---

な反論が見られる。「王位の重荷から免れながら、私は王位の利益を享受し、多くの市民の訪問が私の家に活気を与えております。そして [...] 王笏を持っている私の近しい人のお陰で、私の家に対して多くの恵みが与えられずには、日が昇ることはありません。贅を尽くした饗宴の暮らし向き、私の信用のお陰で多くの者たちに与えられる身の安全。これほど幸せな恵みにまだ何かが欠けていると、私は思うことができるのでしょうか？」(Sénèque, v.687-693)。

王もただの1人の人間にすぎないのです。

(*Ibid.*, II, 4, v.246-250 [Philoctète]).

王の殺害は民衆には重大な罪ではあるかも知れないが、ヘラクレスと同等にある自分にとっては、たとえ正当な理由から王を殺害したとしても、それはどこにでもいる人間を1人殺しただけのことであって、その勝利など取るに足らないものでしかない、とピロクテテスは英雄と人間の価値の違いを強調している。この人間への侮辱に対しオイディプスは反論する。

私は今までの高名な証でピロクテテスを認めております。

あなたのような戦士は君主と同等なのです。

私はそれを知っております。しかしながら、このことについては疑わないで下さい。

ライオスに打ち勝った者は死に値するのです。

彼の首が国の不幸に対して責任を負っているのです。

それであなたは…

(*Ibid.*, II, 4, v.253-258 [Edipe]).

オイディプスにしてみれば、たとえ英雄であってもピロクテテスは人間の王と何ら変わりはない。したがって罪を犯すこともあるし、ましてやその罪は許されるものではない。もちろんピロクテテスにとっては、テーバイの王の言葉は聞き捨てならない。彼は英雄の無可謬性を訴え続けている。

ライオスの勝利者は私ではありません。その言葉だけであなたには充分です。

[…]

卑俗な手段によって自分を正当化するのは

普通の人間、平凡な魂の持ち主だけです。

ですが王や戦士や私のような者は、

一言発するだけで、その人物に基づいて信用されるのです。

オイディプスが私をライオスの殺害で疑うとは！

(*Ibid.*, II, 4, v.258-265 [Philoctète])。

自分のような英雄から発せられた言葉は、それだけで充分信頼に値するものであり、証拠など何も必要はないとピロクテテスは、彼に嫌疑をかけたオイディプスを軽蔑する。だが何と言われようとどんなに見下されようと、オイディプスは証拠なくしてピロクテテスの無罪を確定することはできない。王は法の重要性を彼に伝える。「あなたに判決が下るでしょう。もしあなたの無罪が / 法の公平さ に対し恐れるものが何もないということになれば、 / より多くの光輝をもってあなたの無罪は表に現れるはずです。」(*Ibid.*, II, 4, v.278-280 [Ædipe])。そこまで自分に罪がないと主張するのであれば、法による公正な裁きを何ら恐れる必要はないでしょう、とオイディプスも彼に挑みながら、あくまでも英雄だからといってピロクテテスだけを特別扱いする積りは王にはないのである。したがって誰がライオス殺害の犯人であるかという事実が明らかになるまでは、テーバイに留まるようオイディプスはピロクテテスに要望し、彼も望む所だといわんばかりの態度で答える。

間違いなく私はこの国に残ります。

私の栄光に関わることです。そして私の言うことをお聞きになっているこの天は、

あなたの恥ずべき疑いが、私の顔を赤らめさせた侮辱の仇を

取るまでは、私が出発するのをご覧にならないことでしょう。

(*Ibid.*, II, 4, v.281-284 [Philoctète])。

ピロクテテスにとっては自分が無罪であるということを証明することよ

りも、自分に嫌疑をかけたオイディプスに対して恨みを晴らすことの方が大切なのである。このようにオイディプスに挑んだ後で、彼はこの場を立ち去る。

## 2. 容疑者特定化への3人の見解

ヘラクレスの友人との面会を終え、腹心のイダスプと2人きりになったオイディプスは、彼が実際にライオスを殺害したのかどうかについて本心を明かしている。

正直言えば、私はピロクテテスが犯人だとは信じがたい。  
 彼のような心の揺るぎない不敵さは、  
 偽ってまで自分を卑しめることはできない。  
 嘘はそれほどまでの気高い感情とは相容れないものである。  
 私は彼の中にこのおぞましい卑俗さを見出すことはできない。  
 (Ædipe, OC, t.1A, II, 5, v.285-289 [Ædipe]).

ピロクテテスがどれほど傲慢で不遜であっても、彼のような人物は偽ってまで自分を正当化するとはオイディプスには思われない。次に王は犯罪と容疑者との関係について、一般論をイダスプに打ち明けている。

さらに私はお前に言おう。あの偉大な心を  
咎めなければならない自分を見て、心の中で私は自分を恥じていたのだ。  
 私のあまりの厳格さに対して自分に不満を感じていたのだ。  
国に結びつけられた残酷な必要性！  
王といえども人間の心を読むことはできない。  
彼らはしばしば無罪の者たちに打撃を振りかざす。  
そして我々は、イダスプよ、知らない内に不正なことをしているのだ。  
 (Ibid., II, 5, v.290-296 [Ædipe]).

民衆への見せしめのために、その者が罪を犯したという証拠もないのに、ある時は罪のない者を罪人に作り上げなければならないという、王の辛い立場をオイディプスは嘆くと同時に、またある時は犯人だと思い込んで実際は罪のない者に罪を着せてしまうという、自分自身の慧眼の無さをテーバイの王は痛感しているのである。そしてこのオイディプスの発言の中に、権力者による冤罪に対する非難だけでなく、王だけに限らずどんな人間も無意識に罪を犯してしまう危険性を孕んでいる、という人間と罪との深い関係についてのヴォルテールの見解が伺われる。だからこそ冤罪事件を引き起こさないためにも、確かな証拠を固めた上でしか罪人に烙印を押すべきではない、とヴォルテールは実証の重要性を自作の『オイディプス』を通して訴えていたのである。

だがこの発言の後、唐突とオイディプスはライオスの供の者を召喚していたことを思い出したかのように、「ところで、ポルバスは私の待ちきれない思いに反して何と来るのが遅いのか！ / 最終的に私がいくらかの希望を抱いているのは彼だけなのだ」(Edipe, OC, t.1A, II, 5, v.297-298 [Edipe])と唯一事件を解決してくれるポルバスの到着の遅延に苛々する。しかしオイディプスがライオスの殺害の解明のために生き証人に頼らざるを得ないのは、「憤激した神々が我々に答えてくれず、/ 彼らは沈黙によって自分たちの拒否を示している」(Ibid., II, 5, v.299-300 [Edipe])からなのであって、実際のところオイディプスは信心深く神託も頼りにしているのである。一見すれば、神託に王殺しの犯人を教えてもらおうという彼の態度は、実証主義に反しているのかも知れない。だが彼にとっては証言者も神託も同じくらい証拠になり得るのである。そこには神頼みに走ってしまう弱くもあり、また同時に人間味を帯びた心理がオイディプスの中に描かれていると言えよう。一方そんな王とは反対に腹心のイダスプは、オイディプスの目を覚ませるために、神託が聖職者によって操られているという現実を分からせようと弁舌を振るっている。

祭司がその救いを約束した神々は、

自分たちの神殿にいつも住んでいるとは限りません。  
 彼らの腕はそれほど気前よく奇跡など起こしてはくれません。  
 これらの洞窟や、神々の神託を告げる三脚台、  
 我々の手が作った青銅の道具は、  
 純粋な息吹で活気づけられるとは限りません。  
 神々の聖職者たちへの信奉によって、我々自身を鈍らせないようにし  
 ましょう。  
 聖域の下では神聖な権力を笠に我々を隷属させながら、  
 運命を語らせ、自分たちの好みで運命を黙らせるような  
 裏切り者がしばしばいるのです。

(*Ibid.*, II, 5, v.303-312 [Hidaspe])。

人々を自分たちの意のままに操るために、人間の信じ易さに付け込んで  
 神託を神々の言葉と称し、自分たちの都合のよいように言葉を並べる聖  
 職者の欺瞞をイダスプは糾弾する。したがってライオスの殺人者を神託  
 に頼って見つけようとするオイディプスに対し、彼の腹心のはっきりと  
 進言する。

しっかりと厳密に眺め、調べて下さい。  
 ピロクテテスカ、ポルバスカ、イオカステ自身かを。  
自分しか信用してはなりません。自分の目を通して見て下さい。  
それが我々の三脚台であり、我々の神託であり、我々の神々なのです。

(*Ibid.*, II, 5, v.313-316 [Hidaspe])。

欺瞞者によって作り上げられた神託などに頼るのではなく、細心の注意  
 を払って調査をし、そこから得られた証拠を基に、己の公平な判断によ  
 って判決を下さなければならない、とイダスプはオイディプスに訴えて  
 いるのである。一方、王は「最終的に天が我々の運命を決するとしても、  
 / テーバイ人の救済を天がおぞましい手に / 委ねるのを見ることはない



であろう」(*Ibid.*, II, 5, v.318-320 [Ædipe])と、神の神聖さ是不実者とは無縁であるということ強調する。さらに神託が下されるよう自らデルポイまで赴き、神々の無慈悲さを宥めに行こうとオイディプスは決意するのである(*Ibid.*, II, 5, v.321-322 [Ædipe])。だが神託を信じると同時に、ライオス殺害の目撃者の証言も重要であると考えているオイディプスは、「私が待っているのに、ぐずぐずしているボルバスを急かしに一つ走りしてくれ」(*Ibid.*, II, 5, v.324 [Ædipe])とイダスプに命じている。

とは言っても、上述したように次の第3幕でもボルバスは登場せず、彼の出演はソポクレスと同じように、さらに次の第4幕まで待たなければならぬ<sup>46)</sup>。そしてライオスの臣下と会う前に、第2回目のオイディプスとピロクテテスとの対面が行われる<sup>47)</sup>。先ずテーバイの王は「民衆の声

---

46) ヴォルテールはソポクレスの『オイディプス』では、「ボルバスは第4幕においてついに到着する」(*Lettres sur Œdipe*, OC, t.1A, p.338)と言っていた。彼のギリシア悲劇における幕の数え方を採用すれば、ヴォルテール自身の悲劇でも同じ幕までボルバスは登場しないということになる。

47) この対面の前に、コルネイユの『オイディプス』のテセウスとディルセの愛の場面を明らかに真似たと思われる、イオカステとピロクテテスとのやり取りの挿話がヴォルテールにも見られる。かつての恋人の身の危険を案ずる王妃は、「私の義務はあなたから離れることを命じています。それは本心です。/それはあなたを忘れることで、あなたを裏切るためではありません。/あなたは人々があなたに向けて準備しようとしている運命についてご存じのことと思います」(*Œdipe*, III, 2, v.65-67 [Jocaste])と、テーバイからピロクテテスが立ち去ることを願う。だがイオカステを失ったことで生を疎ましく思っているピロクテテスは、「軽薄な民衆が私の首を求めて騒いでいました。/私には煩わしく思われる日々から彼らは私を解放してくれるのです」(*Ibid.*, III, 2, v.68-69 [Philoctète])と、むしろ命を奪ってくれる民衆をありがたく思っている。それでも彼女はピロクテテスに対し、「出発して下さい。あなたはまだあなたの主人なのです。/ですがこの瞬間があなたをおぞましい死から/私がお救いできる最後の瞬間なのです。/逃げて下さい。そして私から離れるよう歩を速め、/幸いにも救われたあなたの命の代償として、/あなたに命を永らえさせたのは私であるということを忘れて下さい」(*Ibid.*, III, 2, v.71-76 [Jocaste])と、旅立つよう説得を続ける。そこでピロクテテ

はあなたの処刑を急かしておりますが、／彼らの血氣に逸る気紛れを恐れ  
ないで下さい。／私は彼らを鎮めました」(*Edipe*, OC, t.1A, III, 3, v.111-  
113 [*Edipe*]) と、ピロクテテスに現状を報告する。しかしながら、た  
とえ民衆の声を抑えつけたとしても、ピロクテテスの無罪が確定した訳  
ではない。オイディプスは正直に伝えている。「何も決心させることがで  
きなかった私の不確かな精神は、／あなたに有罪の宣告をすることはで  
きません。ですが、あなたを無罪にすることもできません。」(*Ibid.*, III,  
3, v.119-120 [*Edipe*])。もちろん判決を言い渡すことができないのは、  
確かな証拠がないからなのだが、オイディプスにとって証拠固めとなる  
ものはやはり神託なのである。彼はピロクテテスにその意向をはっきり  
と示している。「大祭司の声を通して天は犠牲者の名前を挙げます。／そ  
して私は自分たちよりも賢明な我々の神々に、／私の人民とあなたとの  
間で決着をつけてもらうことを委ねます。」(*Ibid.*, III, 3, v.124-126  
[*Edipe*])。オイディプスからすれば、神々によって示される人物こそラ

---

スも今度は彼が「私が逃げるのではなく、私が死ぬことを命じて下さい」(*Ibid.*,  
III, 2, v.80 [*Philoctète*]) とイオカステに懇願するのであるが、再度彼女から「命  
を救って下さい」(*Ibid.*, III, 2, v.97 [*Jocaste*]) と同じ答えが返って来る。この返  
答に彼と離れるというイオカステの決心は揺るぎないものであることを悟ったピ  
ロクテテスは、最後にもう一度かつての恋人に懇願する。「死だけが私の不幸を  
終わらせる唯一の方法なのです。／私はあなたのためだけに生きました。ですが  
別の男があなたを所有しています。／もし私が息を引き取りながら墓場まであな  
たへの尊敬を持ち去ることができるのでしたら、／私は充分幸せで、私の運命は  
あまりにも美しいものとなるのです。」(*Ibid.*, III, 2, v.99-102 [*Philoctète*])。もは  
やそこにはヘラクレスと共に世界を駆け巡った英雄の面影は見られないように思  
われる。一方コルネイユでは、自分の命をテーバイのために捧げると主張するデ  
イルセを救うため恋人のテセウスは、実は自分がオイディプスで彼女の兄である  
とデイルセに述べ、自分が犠牲になることを主張しているのである (Corneille, IV,  
1)。しかしそう言いながら愛を隠し切れないアテナイの英雄の滑稽さをヴォルテ  
ールは激しく揶揄しているが (*Lettres sur Edipe*, OC, t.1A, p.356)、彼のピロクテ  
テスにも同じ批判が返って来るであろう。

イオス殺害の犯人であり、大逆と疫病で穢されたテーバイを浄めるために、祭壇に捧げなければならない犠牲者なのである。だが神託による判決に全幅の信頼を置いているオイディプスにヘラクレスの友人は、「私はピロクテテスなのです。そして私はあなたにぜひ教えておきたい。／あなたが従うという法の適切な公正さは、／たとえそれがあなたにとっては大変なことではあっても、私にとっては不十分なのです」(*Ibid.*, III, 3, v.128-130 [Philoctète])と反論する。ここで言及されている法とは神託のことを指しているのだが、ピロクテテスにとってはイダスプと同じように神々の言葉など何の確実性もないのである。ただ2人の間には、一方は無可謬性を、他方は理性を根拠に置いているという大きな違いがある。したがってピロクテテスは、またもや自分がライオス殺害の犯人でないことを示すために次のように言い放っている。

証人は私だけで充分でした。

私の人生を調べるだけで充分だったのです。

神々の支えでありアジアの征服者であるヘラクレス、  
その彼が怪物や暴君らを屈服させることを私に教え、  
彼らこそが私の前に来させねばならない証人たちなのです。

(*Ibid.*, III, 3, v.134-138 [Philoctète])。

オイディプスとの最初の対面の時にも見られたように、武勲を積み上げてきた英雄の存在そのものが疑う余地のない何よりの証言である、とピロクテテスは改めて英雄の无可謬性を主張する。それ故オイディプスにとって神託が公正な法であるとすれば、反対にピロクテテスにとっては自分こそが公正な法とも言える。だがこの英雄は神託に関してテーバイの王に一步譲ることにする。

しかしながら、あなた方の神々の代弁者に尋ねて下さい。

我々は彼から神々の声が私を告発するかどうかを知ることでしょう。

私は神々を必要とはしませんが、私は神への関心からではなく、  
この人民への憐みから彼らの判決を待ちます。

(*Ibid.*, III, 3, v.139-142 [Philoctète]).

神託が告げることは信用できないが、それでもアポロンが何を告げようとも、それが苦境に立たされているテーバイ人を救うのであればと、ピロクテテスは慈悲心から託宣に耳を傾けることに決めるのである。さてこの英雄に対するライオス殺害の嫌疑を巡る議論はこれで終わるのであるが、この一連の論争には、容疑者を特定化するためのオイディプス、イダスプ、そしてピロクテテスのそれぞれの判断基準が示されていた。神託に頼るということを省けばオイディプスとイダスプの考え方に、冤罪事件に立ち向かうためのヴォルテールの見解を垣間見ることができると思われる。

#### IV. ライオス殺害者の発覚

##### 1. 神託による伏線

##### (1) 大祭司の神託

この最後の章ではライオスを殺めた犯人が発覚するまでの過程を考察したい。もちろんここではオイディプスを中心に話が展開して行くであろう。さて先ほどのピロクテテスとの2回目の対談が終わると、デルポイまでアポロンの神託を聞きに行った大祭司が彼らのもとに帰って来た。しかしながら、真実を全て知った大祭司は神託を述べることに苦しみを感じ (*Edipe*, OC, t.1A, III, 4, v.147-150 [le Grand-Prêtre])、オイディプスに対し「ああ！もしあなたが私を信用するのであれば、私に尋ねないで下さい」と託宣を伝えることをためらう (*Ibid.*, III, 4, 154 [le Grand-Prêtre])。そのような大祭司の態度にオイディプスが、不幸なテーバイの人々を救うためにも彼らに情けをかけ、神のお告げを伝えるよう催促すると (*Ibid.*, III, 4, v.155-157 [Edipe])、今度は「オイディプスは彼らよりも憐れむべきものです」 (*Ibid.*, III, 4, v.158 [le Grand-Prêtre]) と聖職者は

意味ありげな返答をする。そこで2組のコロスも演劇に参加し、一緒になって大祭司にライオス殺害の犯人の名前を挙げるよう懇願するのであるが (*Ibid.*, III, 4, v.159-164 [Premier et Second Chœurs] et v.166 [Premier Chœur])<sup>48)</sup>、それでもやはり聖職者は下手人の名を明らかにせず、その代わりに次のような謎めいたことを皆の者に聞かせる。

罪人の名前を一言聞いただけであなた方は恐怖で震えるであろう。  
この瞬間私の声を通してあなたに話しかけている神は、  
追放こそが彼の唯一の罰であることを命じています。  
しかしまもなく不吉な絶望を感じた  
彼の手は、天の厳格さを倍增させるであろう。  
あなた方の目は彼のぞっとするような体罰に驚愕するであろう。

(*Ibid.*, III, 4, v.168-173 [le Grand-Prêtre])。

ライオスの殺害者に対してどのような罰を与えるべきかという神託の御法が示されると同時に、全てが解明されたのちのその者の行いが予言されている。つまり劇の最後で己の目に自ら罰を与えるオイディプスの振る舞いに伏線を敷いているのである<sup>49)</sup>。だが、真実を知っているために口

48) ヴォルテールは『オイディプス』のコロスの出演に関するダシエの意見に異を唱えていた。「ダシエ氏はギリシア人に倣って、全ての場面でコロスを登場させるようにと私に助言をしてくれました。それはプラトンの長衣を着て、パリの通りを散歩することを私に勧めているようなものでした。」Lettre à Charles Porée, 7 janvier 1731, GC, t.I, p.257.

49) ヴォルテールの戯曲では、ライオスが父親でありイオカステが母親であった、ということがオイディプスに明らかにされると彼はその場を離れる。そして立ち去ったオイディプスの身を、「おお私の息子よ！ああ私は私の夫と呼ぶのか？/最も愛おしい呼び名の恐ろしい組み合わせよ！/それで彼は死んだのか？」(*Edipe*, OC, t.1A, V, 6, v.208-210 [Jocaste])と案じるイオカステに対して、大祭司は王の様子を伝えている。「彼は生きております。そして彼を打ちのめした運命は/彼

にするのを憚っている大祭司の気持ちを読み取ることができないオイディプスは苛立ち、ライオスの殺害者の名を明かすよう強要する (*Ibid.*, III, 4, v.177-178 [Edipe]). そこでついに大祭司は「あなたです」 (*Ibid.*, III, 4, v.178 [le Grand-Prêtre]) とライオスを殺めたのがオイディプスであることを明言するに至る。するとその告白を耳にしたイオカステは神託を非難しオイディプスを庇い<sup>50)</sup>、一方ピロクテテスは皮肉交じりに王を慰めた後、何を思ったのかテーバイを去ることを突然決意するのであるが<sup>51)</sup>、これについてはヴォルテール自身も大いに反省している<sup>52)</sup>。

---

を生者と死者から引き離したように思われます。／彼は命を絶つ前に光を自分から奪いました。／私は彼が自分の父親の血に浸されたこの剣を／自分の目の中に刺すのを見ました。／彼は自分の運命を完遂しました。そしてこの重大な瞬間が／テーバイ人たちの救済を告げる最初の印なのです。」 *Ibid.*, V, 6, v.210-216 [le Grand-Prêtre].

- 50) 神託を信用していないイオカステは次のように言っている。「神々の代弁者よ、あなた [=大祭司] は我々に大胆にも何をおっしゃるのですか？／何と私の夫であるあなた [=オイディプス]、あなたが殺人者だというのでしょうか？／私が王冠と手を差し出したあなた様が？／いいえ、いいえ、神々の神託は我々を欺いているのです。」 *Edipe*, OC, t.1A, III, 4, v.180-183 [Jocaste].
- 51) ピロクテテスは言っている。「神々の声にもかかわらず、私はあなたを無罪であると信じております。／この国の民衆とあなたは私にはして下さいませんでした、／私はあなたに当然与えられるべきあなたの正しさを認めましょう。／私は恐怖に満たされたこの国を永遠に捨てます。／私にとって栄光への道はこの国では閉ざされています。／私とその遺灰を持っているこの英雄 [=ヘラクレス] の足跡を辿り、／擁護することができる不幸な人々を探しに参りましょう。」 *Edipe*, OC, t.1A, III, 4, v.190-196 [Philoctète].
- 52) ヴォルテールは自作の『オイディプス』でのピロクテテスの役割について次のように反省している。「ピロクテテスは第1幕に登場し、第3幕に立ち去る。最初の3幕しか彼は話題にならないし、最後の2幕にいたっては、彼について一言も話題にされていない。彼は劇の結びにほとんど貢献しておらず、大団円は彼がいなくても完全に成し遂げられる。したがってこの作品は、2つの悲劇のように思われる。一方ではピロクテテスを軸に展開し、他方ではオイディプスを軸に展開

そして肝心のオイディプスはといえば、自分をライオスの殺害者と断言した大祭司の言葉に逆上し、今までの敬虔な態度とは打って変わって激しく彼を罵っている。

そうだ、これが祭壇の特権とはどういうものであるかということよ、  
偽善者よ。したがってお前の神聖を穢す口は、  
お前の王を呪うべき大罪で告発するために、  
無礼千万にも神々との交流を悪用しているのだ。  
私の怒りは、お前の手が辱めた神聖な聖職者を  
依然尊敬しなければならない、とお前は思っていることであろう。  
謀叛人よ、お前の声が話させているお前の神々を見ながら、  
祭壇の下にお前を犠牲にしなければならないであろう。

(*Edipe, OC*, t.1A, III, 4, v.199-206 [*Ædipe*])。

このオイディプスによる瀆聖はソポクレスでは、預言者のテイレシアスとイオカステの兄のクレオンに向けられている (*Sophocle*, v.380-403 et 532-542 [*Edipe*])。一方ヴォルテールではクレオンが登場しない分、大祭司だけが攻撃的となっているが、内容的には同じ場面が導入されていると言える。そしてオイディプスからの罵倒にもかかわらず、大祭司は冷静に先ず王にこう切り出す。

私の命はあなたの手の中にあります。あなたはその主人です。  
あなたが主人でいられるこのいつきを活用して下さい。  
今日あなたの判決があなたに宣されるでしょう。

---

するのである。」 *Lettres sur Edipe, OC*, t.1A, pp.365-366. だが同じように、テセウスとディルセの色恋話を挿入したコルネイユの『オイディプス』についてヴォルテールは、「テセウスの情念が悲劇の主題であり、オイディプスの不幸はエピソードでしかない」と、主題と挿話の逆転について批判している。 *Ibid.*, pp.356-357.

震えて下さい、不幸な王よ。あなたの統治は過ぎ去りました。

(*Edipe, OC*, t.1A, III, 4, v.207-210 [le Grand-Prêtre])。

大祭司はオイディプスの怒りを物ともしていない。それよりもむしろこれから不幸へと転げ落ちていく王を憐れんでいるとさえ言える。次に大祭司はオイディプスに降りかかる今後の状況とそれに伴う彼の行いを語り始める。

目に見えない手が、あなたの頭上に  
復讐によって用意された威嚇的な剣をぶら下げております。  
 まもなくあなたは自分自身が引き起こした己の大罪に恐れおののき、  
 自分で昇りつめた王冠から遠くに逃れ、  
 聖なる火と身体に必要な水を奪われたあなたは、  
 人のいない洞窟をあなたの叫び声で満たしながら、  
 至る所で復讐の神の攻撃を感じ、  
 あなたは死を求めますが、死はあなたから逃げ出して行くこと  
 でしょう。

(*Ibid.*, III, 4, v.211-218 [le Grand-Prêtre])。

ここではオイディプスがライオスの犯人であると判明したのちの彼の運命が予言されている。オイディプスはどこに逃れようとも苦しむが、死ぬことは彼には決して許されておらず、シーシュポスのように永遠の責め苦に悩まされ続けることになるのである。しかしこの大祭司の発言で重要なことは、その原因がオイディプスに対する復讐、つまりライオスを殺害したのが彼であるということが暗示されているということである。そして最後に大祭司は言っている。「あなたの意に反しようとも、罪と罰に運命づけられた / あなたは、決して生まれなければ、あまりにも幸せであったことでしょう」(*Ibid.*, III, 4, v.221-222 [le Grand-Prêtre])。オイディプスは生まれながらに罪を犯し罰せられるよう定められている、と



いうことがここでも暗示されている。

だがこの大祭司が述べたことは、観客や読者には分かっても、主人公であるオイディプスには理解できない。そこで侮辱されたと思った王は、大祭司を恥ずべき欺瞞のおぞましい作者と罵りながら、彼がこの場から立ち去ることを命じるが (*Edipe, OC, t.1A, III, 4, v.227-229* [*Edipe*])、大祭司の口から次のような言葉が漏れる。「あなたは絶えず私を裏切り者や詐欺師として扱っております。/あなたの父親はかつて私をそれよりも誠実な者であると見なしてくれました。」(*Ibid., III, 4, v.230-231* [*le Grand-Prêtre*])). もちろんこの発言には、オイディプスはライオスの息子であるということが示されているのであるが、ここでは殺害者についてではなく、親子の認知が伏線の対象となっている<sup>53)</sup>。一方オイディプスは「ちょっと待て…お前は何と言った？何、ポリュボスのことか…私の父親のことか？」(*Ibid., III, 4, v.232* [*Edipe*])) と、コリントス王のことを大祭司は言ったのだと思っている。このオイディプスの発言に聖職者は謎めいた言い方で返答している。

あなたはあまりにも早くあなたの不吉な運命を知ることとなりましたよう。

この日があなたに生と死とを与えることとなります。

あなたの運命は成し遂げられました。あなたは己を知ることでしょう。  
不幸な方よ、どんな血があなたに存在を与えたかをあなたは知っておられるのですか？

あなただけにあてがわれた大罪に囲まれたあなたは、

誰と共に暮らしているのか知っておられるのでしょうか？

53) ソポクレスでは、オイディプスをライオスの殺害者であると宣言したことから、彼に激しく罵られた盲人の預言者テイレスアスの、次のような王への発言が見られる。「私はあなたには愚か者として映っているのでしょうか？それでも私はあなたのご両親の目には賢人でした。」Sophocle, v.435-436.

おお、コリントスよ！おお、ボーキスよ！呪うべき結婚よ！

私にはその生まれに相応しい人倫に忪る

不幸な種族が生まれるのが見えます。その激昂は

全世界を恐怖と嫌悪で満たすことでしょう。

(*Ibid.*, III, 4, v.233-242 [le Grand-Prêtre])。

この大祭司の言葉にはさまざまなことが暗示されている。オイディプスは誰の息子であるのか、現在彼が妻としているのは誰であるのかという親子の認知、また息子であり兄弟でもあるポリュネイケスとエテオクレスの間で繰り広げられる血腥い争い。何よりオイディプスが殺害事件を引き起こした地であるボーキスの名を示すことで、この聖職者はライオスを殺めた犯人が誰であったかを同時に知らせようとしているのである。つまりこの台詞には『オイディプス』の主題が全て凝縮されているのが分かる。そしてこの発言の後、大祭司は王の許から立ち去る。一方、今しがた聖職者が自分に対して述べた内容に対してオイディプスは、「その最後の言葉が私を動かさなくしている」(*Ibid.*, III, 5, v.243 [Edipe])と何かを感じ取り、ようやく冷静さを取り戻した彼は(*Ibid.*, III, 5, v.244 [Edipe])、大祭司の言葉を反芻する。だが考えれば考えるほどオイディプスは、「三脚台に神の力を貸しながら、/ 恐ろしい声によって私の破滅を予告している」(*Ibid.*, III, 5, v.247-248 [Edipe])と、聖職者の口を介して述べられた神の不吉な言葉は、自分の身に降りかかることを予言しているのだと不安に駆られ始めるのである。この姿を見た腹心のイダスプはオイディプスに述べている。

虚しい神託にしっかりと支えられている

祭司は、しばしば君主にも恐ろしいものなのです。

そして盲目的な熱情の中で、自分たちとの神聖な結びつきの

愚かな偶像崇拝者である一徹な民衆は、

信仰心によって法を踏みにじりながら、

王を裏切りながらも神々を讃えていると思っているのです。

(*Ibid.*, III, 5, v.253-258 [Hidaspe])。

神を後ろ盾に持つ聖職者たちは神の代弁者であり、したがって彼らの口から述べられるものは絶対的な力を持つ。その上その力は民衆に絶大な影響を及ぼす。疑うことを知らない民衆は、聖職者たちの言葉を頭から信じ、彼らが望むよう行動することで、自分たちも神に仕えているという気になってしまう。それだけに、神に仕えたと称する者たちの力は一層強力なものとなるのである。イダスプは聖職者たちの権力の乱用と、迷信深い狂信的な民衆を非難しているのであるが、オイディプスには腹心の言葉は耳に入らず、「何という不吉な声が私の心に立ち上るのだ！／いかなる罪が！正義なる天よ！どれほどの恐怖の絶頂か！」(*Ibid.*, III, 5, v.261-262 [Ædipe]) と不安に苛まれ続けているのである。そこでイオカステは、オイディプスを慰めながら、罪は自分にあり自分が犠牲になることで彼が救われることを願う (*Ibid.*, III, 5, v.263-272 [Jocaste])。だがそんな王妃の慰めも甲斐なく王の危惧は募るばかりで、そのためついに真実をはっきりさせようとオイディプスは、ライオスの殺害状況について今度は詳しくイオカステに尋ねることを決断するのである (*Ibid.*, III, 5, v.279-282 [Ædipe])。

## (2) イオカステとオイディプスへの神託

ここではイオカステとオイディプスがそれぞれ自分たちに下された神託を語るといふ、ソポクレスを模倣した場面について考察するのであるが、その前に付言しておく、このギリシア悲劇詩人の場面こそがヴォルテールに『オイディプス』を創作させるに至らせた大きな理由と考えられる。彼は1750年初演の『オレステス』のメヌ公爵夫人への献辞の中で次のように述べていた。「私は手始めに、イオカステとオイディプスの2重の告白がなされる、ソポクレスのこの名高い場面を翻案すること

で、自分の能力を試したのでした<sup>54)</sup>。」ヴォルテールにとっては、王妃と王とが神託を述べ合うこの場面は、ソポクレスの『オイディプス』の金字塔であり、同時にこの場面なくしては自分の悲劇も成り立たないと考えていた重要な一幕であったのである<sup>55)</sup>。したがって、この場面に対するそのようなヴォルテールの思い入れを汲みながら読み解いていこう。さてイオカステと2人きりになったオイディプスは先ず、「あなたが何をおっしゃって下さろうとも、私の不安な魂は / 前と同じくらいしつこい疑いに動かされています」(*Edipe*, OC, t.1A, IV, 1, v.1-2 [*Edipe*]) と、改めて自分の現在の心の状態を述べた後、さらに具体的に自分の懸念を打ち明けている。

私は内心私自身を責め始めています。

極まりない恐怖で満たされた私に、大祭司が述べた全てのことに  
て、

私は密かに自分自身に問うておりました。

私の魂から消え去った幾千の出来事が

群れとなって私の凍てついた精神に差し迫って来ます。

過去は私を狼狽させ、現在は私を打ちのめします。

私は未来の中に恐ろしい運命を見えています。

そして罪が至る所に私の歩みについて回っています。

(*Ibid.*, IV, 1, v.4-11 [*Edipe*])。

54) *Oreste*, « Épître à la duchesse du Maine » [1750], éd. David Jory, OC, t. 31A [1992], pp.400-401.

55) しかしながら、ヴォルテールの友人たちにはこの場面は不評であったと彼は述べている。「彼らはこの一幕はフランスでは決して成功しないだろうと私に断言しました。そして彼らは入念にその場面を避けたコルネイユを読むよう私に勧めました。」*Ibid.*, p.401. また初演当時の俳優たちも、この場面を全く無味乾燥なものとし、彼らは上演するのを最初拒否したとヴォルテールは振り返っている。Lettre à Charles Porée, 7 janvier 1731, GC, t.I, p.257.

現時点ではまだ確信は持てないが、自分は過去に罪を犯したのではないのかというもう1人の自分が、オイディプスを責め立て続けている。そんな強迫観念に取り憑かれている彼の様子を見たイオカステに、「あなたは自分の無罪に確信が持てないのですか？」(Ibid., IV, 1, v.13 [Jocaste])と問われたオイディプスは、以前イダスプに言っていたように<sup>56)</sup>、ここで改めて「人は時には自分が思っていない以上に罪びとである」(Ibid., IV, 1, v.14 [Ædipe])ということを実感し、自分の過去を思い起こしている。

そこでイオカステに対して、ライオスが殺害された時の状況についての質問がオイディプスによって始められる。先ず彼は「ライオスがその不吉な旅を企てた時、/ 彼の傍には護衛人と軍人がいたのでしょうか？」(Ædipe, OC, t.1A, IV, 1, v.19-20 [Ædipe])と王を取り巻いていた人の数を確認するが、イオカステは「すでに申しましたように、たった一人の者が彼に従っておりました」(Ibid., IV, 1, v.20 [Jocaste])と、ポルバスだけが供の者であったと答える。だがそれでもオイディプスに「男はたった1人だけなのですか？」(Ibid., IV, 1, v.21 [Ædipe])と再び尋ねられたイオカステは、念を押すためにその時だけでなくライオスは普段からも護衛をつけずに歩いていた様子を王に語って聞かせる。

#### 財産よりも偉大なこの王は

あなたのように、煩わしいきらびやかさを軽蔑しておりました。  
彼の馬車の前を数多くの軍隊でなされた、豪華な防壁が  
行進するのを、人々は決して見たことはありませんでした。  
彼の権力に屈した臣下の真ん中にあっても、  
恐れるものは何もないかのように護衛もつけず彼は歩いておりました。  
自分の人民の愛によって、彼は守られていたと思っていたのです。

56) オイディプスはピロクテテスにライオス殺害の嫌疑をかける際、イダスプに言っていた。「我々は、イダスプよ、知らない内に不正なことをしているのだ。」(Ædipe, OC, t.1A, II, 5, v.296 [Ædipe]).

(*Ibid.*, IV, 1, v.21-27 [Ædipe])。

民衆から愛されているライオスには軍人も護衛も必要なかったのである。したがって彼には信頼のできる者が1人いれば、旅には充分なのであった。それがポルバスなのである。だがこの描写には、ヴォルテールが理想とする王の姿、つまり彼が最も尊敬していたアンリ4世のイメージが重ねられているように思われる<sup>57)</sup>。そしてオイディプスがイオカステにライオスの容貌を尋ねると (*Ibid.*, IV, 1, v.31 [Ædipe])、彼女は元夫の風貌を伝えたのち (*Ibid.*, IV, 1, v.32-36 [Jocaste])、付け加えている。

私が思っておりますことをあえて申しますと、  
ライオスはあなたとかなり似ております。  
 そしてあなたの中に、美徳と同様、私の夫の特徴を  
見出すことができましたことを嬉しく思います。

(*Ibid.*, IV, 1, v.37-40 [Jocaste])。

今まであえて口には出さなかったのだが、イオカステは以前の夫であるライオスの面影を、オイディプスの顔にも見ているような気がしていたのである。そしてこの彼女の発言にオイディプスはさらなる不安に襲われてしまう。

私には自分が理解できない不幸が垣間見えます。  
 神々によって吹き込まれた祭司は、私の恐ろしい運命に対し  
余りにも見識があったのではないかと恐れております。

---

57) 『ラ・アンリヤード』(『旧教同盟』)の中では、アンリ4世の寵臣についても次のように言及されている。「彼の全ての寵臣たちの中で、モルネという者だけが唯一彼に従っていた。/モルネは決して追従者ではなく、王の腹心であった。」*La Henriade*, M, t.8 [1877], chant I, v.150-151.

私、私が殺めたというのでしょうか！神々よ！そんなことがありうるのでしょうか？

(*Ibid.*, IV, 1, v.42-45 [Edipe]).

大祭司が先ほど彼に向けて述べていたことが、より一層真実のように思われてきたオイディプスは、自分がライオスを殺したのではないのか、という強い疑念に捕らわれるのである。

そしてイオカステは彼を慰めるために、聖職者と神託との関係を激しく非難した後で<sup>58)</sup>、彼女は今まで黙っていた秘密をオイディプスに打ち明ける。

詐欺師である神託の不明瞭なところまでも  
私が忠実に従ったことに対して、天は私を罰したのです。  
神託は私に自分の息子を差し出させました。私が忌み嫌う神託よ、  
もしあなたの命令さえなければ、もしあなたさえなければ、私の息子は  
はまだ生きていたことでしょう。

(*Edipe, OC*, t.1A, IV, 1, v.63-66 [Jocaste]).

ここで初めてイオカステは、自分にはかつて息子がいたが、彼女に下さ

---

58) イオカステは次のように聖職者と神託の無謬性に激しい疑念を抱いている。「神々の代弁者は絶対に誤りを犯さないのでしょうか？ / 聖なる執行者は神々を祭壇に結び付けております。 / 司祭らは神々に近い存在ですが、彼らも人間なのです。 / あなたは信じているのでしょうか？ 真実が、自分たちの意のままになる / 彼らの鳥の飛翔に実際にかかっており、 / 神聖な刃の下で呻いてる牡牛が / 彼らの切り裂くような眼差しでもって未来を明かし、 / そして彼らの花綱で飾られたこれらの生贄が / 彼らの腸の中に人間の運命を司っていると。 / いいえ、いいえ、曖昧な真実を求めること、 / それは神性の権利を詐称することです。 / 我々の司祭たちは軽薄な民衆が考えているような者ではありません。 / 我々の信じ易さが彼らのあらゆる知識を支えているのです。」(*Edipe, OC*, t.1A, IV, 1, v.46-58 [Jocaste]).

れた神託を誤って解釈したせいで彼を犠牲にしてしまったことをオイディプスに打ち明ける。その事実を知って彼は驚いたものの、すかさず彼女にどんな神託が告げられたのかと尋ねると (*Ibid.*, IV, 1, v.67-68 [Œdipe])、彼女は当時のことを語り始める。

私の息子の運命を気に掛ける私の愛情は  
我々の神々の有名な巫女に尋ねました。  
ああ悲しいことよ、運命が我々に隠しておきたい秘密を、  
引き出そうとするのはいかなる激情なのでしょう？  
しかし結局私は母親なのでした。そして弱さに満ちた  
私は恐る恐る巫女の足下に身を投げ出しました。  
これが彼女たち自身の言葉です。私はそれを記憶に留めております。  
もしこの唯一の思い出に私の体が震えたのでしたらお許し下さい。  
「お前の息子は自分の父親を殺すだろう。そして神聖を瀆すその息子は、  
近親相姦者で、尊属殺害者で……」おお、神々よ、私はそれを言いおお  
せましょうか？

(*Ibid.*, IV, 1, v.73-82 [Jocaste])。

ヴォルテールはただイオカステに下された神託の内容を提示しているだけでなく、もともと息子の将来を気に掛け、王妃としてではなく1人の母親として、神託を伺いに行った彼女の母性愛を彼女に語らせていることに注目したい。そして最後まで神託を口にすることができなかったイオカステに対して、オイディプスが続きを求めると (*Ibid.*, IV, 1, v.83 [Œdipe])、彼女は重い口を開く。

最後に巫女は私に予言しました。  
私の息子、この怪物は私の床に入り、  
私が、彼の母親である私が、自分の父親を殺害し  
血を滴らせている彼を腕の中に受け入れ、



そして2人は恐ろしい関係によって結ばれ、  
私は自分の不幸な息子に息子たちを与えるであろう、と。

(*Ibid.*, IV, 1, v.83-88 [Jocaste]).

先ほどの神託でもそうだったように、これらの巫女の言葉は結果的にはライオス殺しの犯人について言及しているということになるのだが、それよりもここではイオカステの息子が犯すであろう父親と母親に対する罪の予言が優先されているので、王殺害者よりも親子関係の認知の伏線が敷かれていると言える<sup>59)</sup>。同時にのちにテーバイの覇権を巡って争うこととなるポリュネイケスとエテオクレスの出産までもが予言されている。

このイオカステの話を聞いてオイディプスが震えているのを目にした彼女は、先を話すのをやめようかと彼を気遣うが (*Œdipe, OC*, t.1A, IV, 1, v.89-90 [Jocaste])、彼がその息子をどうしたのかと彼女に尋ねたので (*Ibid.*, IV, 1, v.91-92 [Œdipe])、王妃は子を愛する母親の辛い思いを吐露しながら答える。

私は私の息子のために母親である私の愛を消しました。

この愛の絶対的な声が我々の神々に異を唱え、  
彼らの法を非難しても無駄でした。

[…]

彼の運命の恐怖に対し打ち勝たせようと考え、  
私は憐みから彼に死を与えるように命じました。  
悲しいのと同じくらいに罪深い憐みよ！

(*Ibid.*, IV, 1, v.94-101 [Jocaste]).

59) ソポクレスでは、近親相姦と尊属殺害の神託についてオイディプスは両方とも語っているが、イオカステは尊属殺しだけ言及している。反対に近親相姦に関してはティレシアスがオイディプスに詳しく語っている。Sophocle, v.713-714 [Jocaste]; v.791-793 [Œdipe]; v.458-460 [Tirésias].

ここでもライオス殺害の犯人よりも、オイディプスとイオカステとの母子関係の認知が暗示されているのであるが、生まれながらに罪に結び付けられている子供が、今後辿る運命を思うだけでも王妃はいたたまれなくなり、母親としての激しい葛藤に苛まされながらも、母性愛を無理やり抑えつけ息子から命を奪うことに決めたのである。しかしながらも、彼女のそんな悲痛な行いも虚しく、ライオスは殺されてしまったのである。そこからイオカステの話の対象は神託へと向けられる。

人を欺く偽りの神託の不明瞭さよ！

私の残酷な対処からどんな成果が私に与えられたのでしょうか？

私の不幸な夫はそれでも死んでしまったのです。

彼の順調な運命の勝利に満ちた流れの中で、

彼は外国人の手にかかって殺害されたのです。

彼にこの攻撃を与えたのは私の息子ではありませんでした。

そして私は私の夫を救うことなく、私の息子までも失ったのです。

(*Ibid.*, IV, 1, v.102-108 [Jocaste])。

息子が父親を殺害するということで、心を鬼にしてその子供を犠牲にしたのだが、結局ライオスは見知らぬ者の下に命を落としてしまったのである。当然イオカステにとっては神託ほど疑わしいものはないという結論に達する。そこから彼女は神託に怯えているオイディプスを、「少なくともこの恐ろしい例があなたに教訓を与えますように。／司祭があなたに吹き込んだ恐怖を吹き消して下さい。／私の過ちを活用して下さい。そしてあなたの精神を落ち着けて下さい」(*Ibid.*, IV, 1, v.109-111 [Jocaste]) と言って彼の心を和らげようと努めるのである。

しかしイオカステのそうした慰めもオイディプスを落ち着かせることはできず、彼はさらに自分の運命に対して疑懼の念を抱き彼女に警告をする。「あなたとのこの辛い会話によって、／私の運命とあなたの恐ろしい運命との関係を知ったのでしたら、／あなたは私のように恐れで震え

ることでしょう。」(*Edipe*, OC, t.1A, IV, 1, v.115-117 [*Edipe*])。オイディプスがイオカステとの間に垣間見ている共通の運命も、親子関係の認知を暗示するものだが、そこに彼は彼女よりも先に不吉なものを感じ取っている。そして今度はオイディプスが以前デルポイに奉納しに行った時の様子をイオカステに話し始める。

私の若い手は厳粛な寄贈で、初めて  
祭壇を飾り立てに参りました。  
すると突然寺院の屋根裏が半分だけ開き、  
大理石は恐ろしい条で覆われ、  
長い振動によって揺れ動かされた祭壇から、  
見えざる手が私の貢物を押し返しました。

(*Ibid.*, IV, 1, v.123-128 [*Edipe*])。

供物を捧げるためにアポロンの神殿に赴いたオイディプスは、自分の奉納が神から拒否されるのを目にする。さらに稲光の中で風によって恐ろしい声が彼の耳もとまで運ばれ (*Ibid.*, IV, 1, v.129-130 [*Edipe*])、オイディプスに「神聖な場所の清らかさをもはや汚しに来るではない。／神々はお前を生者たちの中から拒み、／彼らはお前の不敬虔な捧げ物を受け入れることはない」(*Ibid.*, IV, 1, v.131-133 [*Edipe*]) と囁いたのである。そしてオイディプスは自分に下された予言をイオカステに語る。

私の魂が恐怖に身を任せている一方で、  
この声は私に予告しました。あなたはそれを信じることができるでしょうか？  
かつて天があなたのお子様を脅迫した途方もない大罪を、  
全て組み合わせた恐ろしいものが、私に告げられたのです。  
私は自分の父親の殺人者になるであろう、と。

(*Ibid.*, IV, 1, v.137-141 [*Edipe*])。

ここで初めてオイディプス自身にも尊属殺人者になるという神託があったことが明らかにされる。さらにイオカステの驚きの後に (*Ibid.*, IV, 1, v.142 [*Jocaste*]), 「私は自分の母親の夫になるであろう」 (*Ibid.*, IV, 1, v.142 [*Œdipe*]) と告げられたこともオイディプスは彼女に伝えるのである。それを耳にしたイオカステも、「私はどこにいますのでしょうか? どのような悪魔が私たちの心を結びつけながら、/ 愛しい王よ、これほどの恐怖の中に我々を引き合わせることができたのでしょうか?」 (*Ibid.*, IV, 1, v.143-144 [*Jocaste*]) と、彼との不吉な運命を感じ取るのである。しかしこれらのイオカステとオイディプスに告げられた神託は、親子関係を示すための伏線であり、ヴォルテールの戯曲ではこの父子・母子の認知は、演劇の最後の最後で2人の間で行われることとなる<sup>60)</sup>。そして今見てきた王と王妃のやり取りは、今度はこの悲劇の最初の主題であったライオスの殺人者の犯人捜しの話題へと戻る。ただここで注意しなければならないのは、ライオスとの父子関係が分かるまでは、父親殺しのオイディプスとしてではなく（もちろんところどころ親子関係を示す伏線も敷かれてはいるが）、王殺しのオイディプスとして話が進んで行くということである。というのもヴォルテールは、4幕でオイディプスが王殺しの犯人と分かり、第5幕で父子・母子の関係が明らかになるように、幕を分けてそれぞれ2つのクライマックスを設けているからである。つまり彼の悲劇は、劇的な結末にするために、王殺害者と親子関係の事実が一気に分かるのではなく、親子関係は最後まで観客や読者には分からない

60) 『オイディプス』ではオルレアン公フィリップと娘のベリー侯爵夫人との近親相姦が暗に示されているが、彼らを揶揄した諷刺詩をヴォルテールは1716年に書いていた。「それは息子ではありません。父親なのです / それは娘なのです。いいえ母親ではないのです。/ [...] / 彼らはすでにエテオクレスを産みました。/ もしたまたま両目でも失えば / それはまさしくソボクレスの主題なのです。」  
 « Poésie sur M. le duc d'Orléans et M<sup>me</sup> de Berry, sa fille » [1716], *M*, t.10 [1877], p.473.

いように構成されている<sup>61)</sup>。それでは、最後にオイディプスがライオスの殺害者であると判明するまでの過程を考察しよう。

## 2. ポーキスでのライオスの殺害

### (1) オイディプスのポーキスでの記憶

オイディプスがイオカステと同じ内容を持つ神託を伝え終えた後、彼はさらに「まだ涙をこぼす時ではありません。／あなたはやがて不安を掻き立てる別の問題を知ることでしょう。／私の話を聞いて下さい。あなたは震えることでしょう。」(*Edipe, OC, t.1A, IV, 1, v.145-147* [*Edipe*])と、王妃に打ち明けねばならない恐ろしい話がまだ残っていることを教える。そこでオイディプスは彼に下された神託が原因でコリントスを離れた時のことを話す。

私は祖国の内部から逃げなければなりませんでした。

私の意に反して罪深い私の手が、ある日

敵である運命に忠実に従うのではないのかと恐れました。

[…]

泣き濡れた母親の腕から私は身を引き離し、

私は出発しました。

(*Ibid.*, IV, 1, v.148-154 [*Edipe*])。

オイディプスは自分の祖国であるコリントスに留まっていたは、いつか神託の予言通り自分の父親のポリュボスを殺害してしまうかも知れないと危惧し、引き留める母の腕を振り払ってコリントスを後にしたのであった。それからオイディプスは、国から国へと駆け回り、その間は自分

61) これについてはA・J・エイヤーも、ソポクレスの悲劇では劇の初めから観客はオイディプスの出生の秘密に与っており、他方ヴォルテールにおいてはその秘密は大詰めになるまで観客には隠されている、と指摘している。A. J. Ayer, *op. cit.*, p. 7.

の出生と名前を偽り、また同伴の者は1人だけであったと旅の様子をイオカステに聞かせる (*Ibid.*, IV, 1, v.154-156 [Ædipe])。だが彼はふと「この重大な旅では一度ならず争い事があり、/ 私を導いて下さった神は私の勇気を手助けして下さいました」 (*Ibid.*, IV, 1, v.157-158 [Ædipe]) と途上で起きた揉め事について口にする。するとオイディプスは、「これらの争い事の1つでも、気高い死によって / 私の運命を終わらすことができたなら、幸せだったでしょうに。/ しかし私は王殺しにきっと運命づけられていたのです」 (*Ibid.*, IV, 1, v.159-161 [Ædipe]) と、ライオス殺しへの自身の関与を強く疑い、その疑懼はすぐに確信へと変わってしまう。オイディプスにおいて、以前2人の者に出会ったことの記憶が呼び起こされたのである。

ついにポーキスの野原でのことを私は思い出しました。  
 (私はどのような魔法によってかは分かりませんが、  
 今までその重大な出来事を忘れていました。  
 長い間私の上に吊るされていた神々の手が、  
 私の目に置かれていたバンドを外してくれたように思います)  
 細い道で私は2人の戦士に会いました。  
 (*Ibid.*, IV, 1, v.162-167 [Ædipe])。

ソポクレスでは、ライオスが殺害された場所についてオイディプスに尋ねられたイオカステは、殺害現場はポーキスでしたと答えているのだが (Sophocle, v.732 [Ædipe] et 733 [Jocaste])、ヴォルテールにおいては、現在まですっかり忘れていた言い訳をしながらも、オイディプスのかの地での出来事を思い出したのである。だが現王に突然記憶が蘇ったことについて、ヴォルテール自身大いに反省している。

オイディプスがポーキスでのこの出来事について語らなければなら  
なかったのは第1幕であったことは明らかである。というのも、神々

がライオスの殺害者の処罰を望んでいる、ということを大祭司の口からオイディプスが知ったのならすぐに、彼の義務は細心綿密にそして遅れることなく、この殺害の状況について調査することであるのだから。ライオスはポーキスで殺害されたと人は彼に答えなければならない。そして当時ポーキスで2人の外国人を相手に戦ったことを知っている彼自身も、その瞬間からライオスは自分の手によって殺されたのではないかと疑わなければならない。この過ちを隠すために、神々の復讐がある期間はオイディプスから記憶を取り除き、別の時にそれを彼に取り戻させる、というように想定しなければならなかったのは悲しいことである<sup>62)</sup>。

もともとソポクレスの『オイディプス』に見られた、ライオスの殺害者が発覚するまでの流れの不自然さを正すために、ヴォルテールはこの悲劇に挑戦しようと思い立ったのであるが、結局彼自身も自然な展開で話を進めることができなかった、と自分の力不足を彼は素直に認めているのである。

さて話を戻すと、2人の戦士と出会ったオイディプスは、彼らと道を争って戦った当時の状況を詳しくイオカステに話しながら (*Œdipe, OC, t.1A, IV, 1, v.167-183 [Œdipe]*)、「そして一方の者も他方の者もついに私の足下に倒れました」 (*Ibid., IV, 1, v.184 [Œdipe]*) と最後には2人を打ちのめしたことを告白する。さらにオイディプスはその時に倒した老人の様子についてもイオカステに語っている。

私は思い出しますが、年齢ですでに生気を失い  
砂埃の上に横になった彼らの内の1人は、私の顔を注意して見ていました。  
彼は私に手を差し伸べ、彼は私に何かを言おうとしていました。

62) *Lettres sur Œdipe, OC, t.1A, pp.369-370.*

瀕死の彼の目から涙が流れるのを私は見ました。

(*Ibid.*, IV, 1, v.185-188 [Ædipe]).

この時点では、この老人がテーバイの先王ライオスであったということはオイディプスも感じ取っているのであるが、自分の父親であることは知らない。だが反対にライオスの方は、かつて神託のために犠牲にした息子であると気づき、申し訳なさりと懐かしさから涙を流し、さらに自分に対してなされたことを許している。このようにヴォルテールは父親の視点からの父性愛を、オイディプスの証言を通して描写している。そしてこの子供に対する父親の愛情は、のちのヴォルテール悲劇では母性愛よりも多く主題として取り入れられるのである。したがって、この短いオイディプスの台詞は、ヴォルテールにとって自分の悲劇のテーマを確立する上での1つの方針になったと思われる<sup>63)</sup>。そしてオイディプスの口を通してこの話を聞いたイオカステが、震えているのを彼が認めたその時 (*Ibid.*, IV, 1, v.190 [Ædipe])、ポルバスの到着が知らされたのであった (*Ibid.*, IV, 1, v.191 [Jocaste])。

---

63) 父親と子供たちを扱ったヴォルテールの悲劇は以下の通り。なお最初に挙げられる人物名は全て父親である。①『ブルートゥス』(1730年・ブルートゥス — ティテュス [息子]) ②『ザイール』(1732年・リュジニャン — ザイール [娘] とネレスタン [息子]) ③『カエサルの死』(1733年・カエサル — ブルートゥス [息子]) ④『アルジール、またはアメリカ人』(1736年・アルバレス — ギュスマン [息子] / モンテーズ — アルジール [娘]) ⑤『ズリーム』(1740年・ベナサル — ズリーム [娘]) ⑥『狂信、あるいは預言者ムハンマド』(1741年・ゾピール — セイード [息子] とバルミール [娘]) ⑦『タンクレード』(1760年・アルジール — アメナイド [娘]) ⑧『イスパニア人ヘラクレイオス』(1762年・フォカス — レオニード [娘]) ⑨『スキタイ人』(1767年・エルモダン — アンダティール [息子] / ソザーム — オベイード [娘]) ⑩『拝火教徒、あるいは寛容』(1768年・イラダン — アルゼモン [息子] / セゼース — アルザーム [娘]) ⑪『ミノスの法律』(1773年・テウクロス — アステリー [娘]) ⑫『アガトクレス』(1777年・アガトクレス — ポリュクラテス [息子] とアルギデス [息子])。



## (2) ポルバスの証言

ついにポルバスが登場し、彼を見たオイディプスは「来なさい、不幸な老人よ、近寄りなさい」(*Edipe, OC*, t.1A, IV, 2, v.193 [Ædipe])と自分の前に来るよう命ずるのであるが、同時に王は「彼を見て私の魂が蘇って来る恐怖で揺さぶられているのを感じる。 / 混乱した思い出がさらに私を悲嘆に暮れさせにやって来る。 / 私は彼を見て彼に尋問することに戦慄を覚える」(*Ibid.*, IV, 2, v.194-196 [Ædipe])と激しい不安に襲われる。一方イオカステに再会したポルバスは、「つまり私が死ななければならぬ日というのは今日なのでしょうか? / 偉大なる王妃よ、あなたは私の処刑を命じたのでしょうか?」(*Ibid.*, IV, 2, v.197-198 [Phorbas])と尋ねるが、彼女は安心するようポルバスを慰め、その代わり王の質問に答えることを命ずる (*Ibid.*, IV, 2, v.200 [Jocaste])。すると王という言葉に驚いたポルバスに対し (*Ibid.*, IV, 2, v.201 [Phorbas])、再びイオカステはその彼の前に出るよう指示する (*Ibid.*, IV, 2, v.201 [Jocaste])。そこでオイディプスと向き合ったポルバスは、

おお神々よ！ライオスは亡くなりました。そしてあなたが私の主人  
 なのですか、  
 あなたが？

(*Ibid.*, IV, 2, v.202-203 [Phorbas])

と、王の顔を間近で拝見し思わず驚くのである。一方オイディプスの方は、

余計な話は省こう。

お前はライオス殺害の唯一の証人なのか？

噂ではお前は王を守りながら傷を負ったと聞いておるが。

(*Ibid.*, IV, 2, v.203-205 [Ædipe])

と、ライオスが殺害された時の状況を一刻も早く知ることだけが重要なのである。そしてポルバスは「ライオスは亡くなりました。彼の遺灰をそっとしておいて下さい」(*Ibid.*, IV, 2, v.206 [Phorbas])と断りを入れた後、ついに

あなたの手によって傷ついた忠実な臣下の  
不幸な運命を少なくとも辱めないで下さい。  
(*Ibid.*, IV, 2, v.207-208 [Phorbas])

と、ライオスの供の者は自分がオイディプスの剣によって傷を負わされたことを王に証言したのである。したがってその告白を聞いたオイディプスは、「私がお前を傷つけただと。誰が？私が？」(*Ibid.*, IV, 2, v.209 [Ædipe])とポルバスに確認をとるが、反対にライオスの臣下は王に懇願している。

あなたの欲求を満たして下さい。  
私からこの煩わしい命を取り除いて下さい。  
神々が誤らせたあなたの腕が、  
あなたから逃れた残りの血を流させますように。  
そしてあなたがこの不吉な小道でのことを思い出した以上、  
かの地で私の王は…  
(*Ibid.*, IV, 2, v.209-214 [Phorbas])。

ポルバスは辛い思い出から逃れるために、自分の命を奪うよう王に懇願しながら、ライオスの殺害現場となった小道のことを言及しているのである。この言葉でオイディプスは自分が王を殺害したことを確信する。

不幸な者よ、私から残りの話は省いてくれ。  
私が全てをなしたのだ。それが分かった。それで十分だ。おお、神々

よ！

ついに4年ののちあなた方は私の蒙を啓いて下さいました。

(*Ibid.*, IV, 2, v.194-196 [*Edipe*]).

こうしてオイディプスは自分がライオスの殺害者であったことを認めたのだった。

さてそののちの展開を簡単に記させてもらおう。ライオスを殺めたのが自分であると分かったオイディプスは、イオカステに自分を罰するように望むが、彼が王を殺害したのは意図的なものではないので、王妃は彼を許す (*Edipe*, OC, t.1A, IV, 3)。そこへコリントスからの使者が到着したことが伝えられ (*Ibid.*, IV, 4)、オイディプスは彼の前に連れて来るよう命じる (*Ibid.*, V, 1)。そして王は彼の前に現れたのはコリントス王ポリュボスの寵臣イカールであることを知る；そこでオイディプスが使者に用件を尋ねると、ポリュボスが亡くなったことが伝えられ、テーバイ王はコリントス王を弔いに行こうとするが、イカールに止められる；というのもポリュボスの娘婿がコリントスの王位を継承したからである；それを聞いたオイディプスは、自分が父親から裏切られたという気持ちになり憤慨するが、ここでイカールから彼はポリュボスの実の子ではないと初めて知られる；そこから問題は、オイディプスは誰の子であるのかというもう1つの主題に移る；イカールはキタイロン山で1人のテーバイ人が幼子を捨てるのを目にし、その赤子を彼から受け取って、ポリュボスに差し出したところ、跡取りがいなかったこともあり王は彼を養子にし、その捨てられた子こそオイディプスであった、とコリントスの使者は語る；またイカールはオイディプスを手渡した者とはそれから1度も会っていないが、再会すれば彼と分かるだろうと付け加える (*Ibid.*, V, 2)。ちょうどその時、ポリュボスが王の前に現れる。驚いたことにイカールにオイディプスを渡したのはポリュボスであったのである；イカールはすかさずオイディプスを自分に手渡したことを本人に確認する

のであるが、全てを悟ったボルバスは真実を述べることを頑なにためらう；だか自分をイカールに渡したのはお前なのかどうか答えるようオイディプスに強要され、ついにボルバスはそれを認める；さらにその子供の父親はお前なのかと尋ねられたボルバスは、ライオスがその子の父親で、イオカステがその子の母親でしたと答える；この告白によってオイディプスは自分の実の父親と母親を知ることとなる (*Ibid.*, V, 3)。したがってオイディプスは、自分の犯した尊属殺しと近親相姦に対し、激しい罪悪感に苛まれるのである (*Ibid.*, V, 4)。一方何も知らないイオカステは、オイディプスの叫び声を耳にして彼の許に駆けつけ、彼のことを心配する；しかしオイディプスが冷たくあしらうと、彼女は残酷な夫よと彼を責める；その夫という言葉にオイディプスは逆上し、自分がイオカステの実の子であると彼女に伝える；その真実を知り彼女は打ちのめされる (*Ibid.*, V, 5)。そんな中、大祭司が現れテーバイに平和が戻ったことを伝える；イオカステは息子が生きているかどうか尋ねると、オイディプスは自分の目に剣を刺したがまだ生きている、と大祭司は王妃に答える；最後に聖職者は、神はイオカステを許しているので生きよう励ますが、彼女は自分を罪へと導いた神を恨みながら自刃し、幕が閉じられる (*Ibid.*, V, 6)。

## V. おわりに

以上、ヴォルテールの『オイディプス』におけるライオス殺害者の発覚までの過程を見た。もともと彼がこの悲劇をデビュー作品として選んだのは、どうしてオイディプスがライオス殺害の犯人について何も知らないのか、なぜ先王の供の者が生きているのにすぐに呼び寄せて尋問しなかったのか、というソポクレスに見られる「本当らしさ」に反する不自然な展開を直そうという挑戦の気持ちも理由の1つと考えられる。とはいえ彼自身も第1幕でライオスの腹心であるボルバスの名が言及されるものの、結局彼が登場するのは第4幕である。確かにソポクレスよりは、ライオスの殺害者の捜査が今まで行われなかった言い訳が多少述べ

られているが、ヴォルテール自身もボルバスを第1幕で呼ぶべきであったと反省しているように、古代ギリシアに書かれた悲劇の欠点を克服したとはいい難い。しかしながら、第4幕にボルバスが現れるまで、イオカステと元恋人ピロクテテスの色恋の場面はあったとはいえ、ピロクテテスをライオス殺害者の容疑者とすることで、王殺しの犯人の追跡を軸として議論が展開されながら、聖職者と神託に対する批判や、冤罪と法との関係についてのヴォルテールの考えも多少なりとも確認することができた。そしてこの悲劇の全体的な良し悪しは別にして、やはり処女作であるということもあり、ヴォルテールはこの『オイディプス』に生涯を通して愛着を抱いていた。1730年の再版の際には修正を行い<sup>64)</sup>、1737年から1739年にかけても手直しをし続け<sup>65)</sup>、そしてヴォルテールが亡くなる3年前の1775年には、出版社のガブリエル・クラメールの書簡の中で次のように述べていた。

私が昼夜行いました全ての修正に正確に従うようクラメール氏に懇願いたします。これらの手直しは睡眠と健康を私に犠牲として払わせました。しかしながら、それが私の命を犠牲にさせたとしても、もし私の亡き後も多少は耐えられる作品を私が残すことができたのであれば、私は文句は言わないことでしょう<sup>66)</sup>。

64) Lettre à Charles Porée, 7 janvier 1731, *GC*, t.I, p.257.

65) Lettres à Nicolas-Claude Thieriot, 17 janvier et 15 décembre 1737, *GC*, t.I, p.912 et 1040 ; Lettre à Pierre-Robert Le Cornier de Cideville, 23 décembre 1737, *GC*, t.I, p.1047 ; Lettre à Jeanne-Françoise Quinault, 2 janvier 1738, *GC*, t.I, p.1057 ; Lettres à Laurent-François Prault, 27 janvier et vers le 12 février 1738, *GC*, t.I, p.1084 et 1091 ; Lettre au comte d'Argental, 27 octobre 1738, *GC*, t.I, p.1276 ; Lettre à Claude-Adrien Helvétius, 4 décembre 1738, *GC*, t.I, p.1309 ; Lettre à Nicolas-Claude Thieriot, 13 décembre 1738, *GC*, t.I, p.1320 ; Lettre au comte d'Argental, vers le 6 janvier 1739, *GC*, t.II, p.15 ; Lettre à Jeanne-Françoise Quinault, 27 juillet 1739, *GC*, t.II, p.235.

66) Lettre à Gabriel Cramer, 1775 ?, *GC*, t.XII [1988], p.168.

ヴォルテールにとっても決して『オイディプス』は心から満足できるものとは言えない。だが少しでも世の中に残せるような悲劇になるよう彼は常に心を砕いていたのである。また同時にこの処女作品は、劇作家としてデビューしようとした時の初心の気持ちを思い出させ、演劇のために常に粉骨碎身するよう鼓舞し続けたのである。そういう意味でこの悲劇は、いくつになってもヴォルテールにとっては劇作家として生涯を全うするための原動力であったと言えよう。

(本学非常勤講師)

## 【補足：『オイディプス』の主な登場人物】

注記：以下の「オイディプス」と「イオカステ」に関する説明は、全ての劇作家の作品に共通しているので省略する。

オイディプス	テーバイ王。ライオスとイオカステの息子。イオカステの夫。
イオカステ	元テーバイ王ライオスの先妻。オイディプスの母親で妻。

### 1) ヴォルテール (1718年) — イオカステとピロクテテスの色恋話の挿入。

オイディプス	コリントスからの使者イカールの到着前に自分がライオスを殺害したことが分かる。ボルバスとイカールとの対面によって、イオカステより先に父と母を認知する。自刃の前に自ら目を剣で傷つける。
イオカステ	ピロクテテスの元恋人。聖職者と神託を批判する。オイディプスの後に母子の関係を知る。そしてオイディプスが目に剣を突き刺したもののまだ生きているという報告を受けた後、自分を罪へと導いたのは神だと恨みながら自刃する。
ピロクテテス	イオカステの元恋人。ライオス殺害の嫌疑をかけられる。オイディプスがライオス殺害の犯人であると聞くと第3幕で退場する。
大祭司	神託を司り、オイディプスの尊属殺しと近親相姦を暗示する。
イダスプ	オイディプスの腹心。聖職者と神託を批判する。
ボルバス	ライオスの臣下で彼の旅の供。ライオスの殺害の目撃者。イカールに幼子のオイディプスを渡す。
イカール	コリントス王ポリュボスの寵臣で使者。ポリュボスの死を伝えに来る。ボルバスからオイディプスを受け取りポリュボスに差し出す。
コロス	テーバイ市民より成る。

## 2) ソポクレス (前430年頃)

オイディプス	<u>イオカステの後に</u> 、第1の使者とライオスの召使の対面によって、父と母を認知するが、 <u>自分がライオスの殺人者である</u> という言及は省略されている。オイディプスはイオカステの遺体を見た後に、彼女の着物の留め金を抜いてそれを目に突き刺す。目から血潮を垂らしながら舞台に登場し、テーバイを去る決意を示す。
イオカステ	クレオンの妹。コリントスの使者とボルバスとの対面を待たずに、 <u>使者の話だけで</u> 、母と子の関係をオイディプスより先に気づき、全てを知ろうとする彼を引き留める。狂乱の果てに縊死する。
クレオン	イオカステの兄。オイディプスから謀叛の嫌疑をかけられる。
テイレシアス	盲目の預言者で、オイディプスの尊属殺しと近親相姦を暗示する。
ライオスの召使 [ボルバス]	現在は羊飼いで、ライオスと旅を共にした王殺害の目撃者。幼子のオイディプスをコリントス人である第1の使者に手渡す。
第1の使者	コリントスからの使者で、ポリュボスの死を伝える。現在は羊飼いであるライオスのかつての召使から、キタイロン山で「踝が腫れていた」オイディプスを受け取る。
第2の使者	イオカステの縊首の様子と、すでに亡くなった彼女の着物から留め金を引き抜き抜いて、目に刺したオイディプスの様子を報告する。
コロス	<u>テーバイの長老たち</u> より成る。

## 3) セネカ (後50年頃)

オイディプス	<u>イオカステの後に</u> 、老人とボルボスの対面によって、父と母を認知するが、 <u>自分がライオスの殺人者である</u> という言及は省略されている。目に剣を刺した後に再登場し、旅立つことを伝える。
イオカステ	クレオンの妹。コリントスの使者とボルバスとの対面を待たずに、 <u>使者の話だけで</u> 、母と子の関係をオイディプスより先に気づき、 <u>真実を知</u> ることを切望しているオイディプスに対し、全てを明らかにしたことで後悔しないようにと忠告して立ち去る。再び登場した彼女は、オイディプスに自分を罰するよう命じるが、彼がためらうので、自刃する。



クレオン	イオカステの兄。ライオスはポーキスの三叉路で殺害されたとオイディプスに説明する。「オイディプスは尊属殺しと近親相姦の罪を犯した」と呼び寄せたライオスの霊が言っていたと伝え、オイディプスから王位篡奪を企む謀叛人と見なされ投獄される。
テイレシアス	盲目の預言者。オイディプスの目の前で2頭の牛を生贄に捧げ、神託の儀を行うが、生贄は王殺害者の名を示さないで、ライオスの霊を呼び起こすことをオイディプスに勧める。
マント	テイレシアスの娘。
ボルバス	現在は羊飼いで、ライオスと旅を共にした王殺害の目撃者。幼子のオイディプスをコリントスの老人に手渡す。
老人	コリントスからの使者で、ポリュボスの死を伝え、オイディプスに王位を受け継ぐよう勧めるが、母親のメロペとの近親相姦を理由にためらう王を見て、実の子ではないので心配しないようにと真実を打ち明ける。また「踝が腫れていた」オイディプスをテーバイの王家の羊飼いかから受け取り、メロペに差し出したと付け加える。
コロス	テーバイの長老たちより成る。

#### 4) ピエール・コルネイユ (1659年) — ディルセとテセウスの色恋話の挿入。

オイディプス	ディルセの兄。ボルバスを見た時に、ポーキスで出会った2人の内の1人であることに気づき、ライオスを殺害したのは自分であることを認める。ボルバスとイフィクラートとの面談によってイオカステより先に、父と母を認知する。オイディプスの目から流れた血が大地に流れると、テーバイのペストは収束する。
イオカステ	ボルバスが幼子のオイディプスを、キタイロン山で見知らぬある男に手渡したことを、オイディプスよりも先に知る。しかし彼との母子関係については、オイディプスが知った後で、自分が不幸を招いたと彼女に許しを乞うボルバスから直接聞く。ボルバスの自害を見届けてから、彼女も自刃する。
ディルセ	ライオスとイオカステの娘。オイディプスの妹。テセウスの恋人。オイディプスにエモンと結婚するよう勧められるが拒否をし、テセウスと結婚すると宣言する。

テセウス	アテネの王子。ディルセの恋人。犠牲になることを望むディルセを救うため、自分がライオスとイオカステの息子で、ディルセの兄だと主張し始める。
ボルバス	テーバイの老人。ライオスと旅を共にした王殺害の目撃者。生後2日のオイディプスを、キタイロン山でコリントス人に手渡したことを、 <u>オイディプスよりも先にイオカステに伝える</u> 。全てが判明した後、後悔に苛まれ自害する。
イフィクラート	コリントスの老人。使者としてポリュボスの死を伝える。キタイロン山でボルバスから受け取ったのは、テセウスではなくオイディプスであると告白する。

5) メルシオール・ド・フォラール (1720年) — 色恋話の挿入はない。

オイディプス	牢獄から釈放されオイディプスを見たボルボスは、ライオスを殺害したのが彼であることに気づき、それによって王を殺害したのがオイディプスであると判明し、 <u>その場にいたイオカステも事実を知る</u> 。しかし自分の父と母の事実については、イタマールとボルボスの対面によって、 <u>イオカステより後に知る</u> 。イオカステの遺体を目にした彼は目に剣を刺す。
イオカステ	クレオンの妹。イタマールとボルボスとの対面によって、 <u>オイディプスより先に母子の関係に気づき、その場を立ち去り自刃する</u> 。
クレオン	イオカステの兄。息子のメノイケウスを王位に就かせるため、 <u>ライオスの子供の生存を知っているボルバスを投獄する</u> 。しかし、ライオスを殺害したのは自分なのだから自分が犠牲になればならない、と言い張るメノイケウスを救うため、ボルボスに王の殺害者は彼でないことを証言してもらおうと、彼を釈放し今までの不正に対して許しを乞う。
供儀者	ライオスから「自分の父親のために息子は光を失うがよい。王の許に走りなさい。この謎は王が説明するであろう」という神託が下されたことを告げる。クレオンの息子メノイケウスを犠牲として捧げようとする。
メノイケウス	クレオンの息子。ライオスの殺害者と容疑をかけられ処刑を宣告された父のクレオンを救うため、自分がライオスを殺害したと主張し、自ら犠牲になることを主張する。

イタマール	オイディプスの侍従で教育係であるコリントス人。オイディプスに付き添い一緒にテーバイに来る。したがってオイディプスの出生を最初から知っておりずっと隠していたが、ポルボスの指摘を受け彼からキタイロン山でオイディプスを受け取ったことを認める。自分がオイディプスを不幸に導いたことを悔やんで自害しようとするが、オイディプスに引き留められる。
ポルボス	テーバイの老人。ライオスと旅を共にした王殺害の目撃者。オイディプスの生存を知っていたため、息子の王位継承を目論むクレオンによって投獄される。イタマールを見て、自分がオイディプスを手渡した者であることに気づく。
コロス	テーバイの子供たちから成る。

6) アントワヌ・ウダール・ド・ラ・モット (1726年) — 色恋話の挿入はない。

オイディプス	ボレモンによって育てられ、彼を父親だと思っている。オイディプスは、イオカステから <u>ライオスは偶然亡くなった</u> とだけ教えられて、実は王が殺害されたということは知らなかった。だが、イオカステから「 <u>ライオスはボーキスで若者に殺された</u> 」と聞き、自分がライオスを殺害したことに気づく。オイディプスとの血縁関係を知り絶望しているイオカステを心配し、どうしたのかと尋ねるが彼女に頑なに拒まれる。「 <u>オイディプスはライオスとイオカステの子である</u> 」というイオカステからの手紙によって、父と母との親子関係を認知した後には彼は自刃する。
イオカステ	「 <u>ライオスは若者によって殺害された</u> 」ということをイフィクラートから聞いていた」とボレモンに打ち明けられる。フェディームとボレモンの対面により、オイディプスより先に母子の関係に気づく。「 <u>オイディプスはライオスとイオカステの子である</u> 」という手紙を書き残してから自刃する。
ポリュネイセス	オイディプスとイオカステの息子。オイディプスの弟。テーバイを救うため自分が犠牲になると言ってエテオクレスと争う。
エテオクレス	オイディプスとイオカステの息子。オイディプスの弟。テーバイを救うため自分が犠牲になると言ってポリュネイセスと争う。

イフィクラート	ライオスと旅を共にした王殺害の目撃者だが、すでに亡くなっている。亡くなる前に「ライオスは若者に殺害された」とボレモンに打ち明け、神とライオスの霊に怯えながら息を引き取る。
フェディーム	イオカステの侍女。35年前にボレモンに幼子のオイディプスを手渡す。ボレモンを見て彼にオイディプスを渡したことを認める。
ボレモン	コリントス人で、35年前にフェディームからオイディプスを受け取る。オイディプスを育て、彼からは父親と思われているが、彼が出て行ったため探し続けて、イフィクラートの家を訪ねる。最終的にテーバイで王となったオイディプスと再会する。